

現代アイルランド劇作家研究(3): コナー・マクファーソン

河野賢司

はじめに

ダブリン生れの若手劇作家コナー・マクファーソン (Conor McPherson, 1971-) は、1993年にUCDから哲学修士号を取得して修了、劇団「夜間飛行」(Fly By Night Theatre Company)を仲間と旗揚げして小劇場を中心に新作を上演してきた。代表作『堰』(*The Weir*, 1997)でオリヴィエ最優秀戯曲賞を獲得、ブロードウェイにも進出して英米で高い評価を受けた現在も、故郷ダブリンに定住して執筆活動を続けている。拙論連載の2回目(紀要第16号所収)で扱ったほぼ同年代のマーティン・マクドナ¹⁾(Martin McDonagh, 1970-)が、ロンドンからアイルランドを描いているのと対照的である。この点については、マクファーソン自身がマクドナにかなり対抗意識を燃やした、次のようなコメントを寄せているので興味深い。

「マーティンの芝居はとても楽しめる。印象的なのは、彼はアイルランドを悪夢のような土地として書いている。アイルランドは彼の頭のなかに位置しているみたいだ。ことによると、子どものときにこの土地に嫌な思い出があったのかもしれない。僕はアイルランドをそういう風には眺めない。マーティンの世界では、もぐりの酒場(shabeen [sic])は口論する土地の人々でいっぱいだろう。現実には、そうした場所はとても親密であり、口さがない連中ばかりではない。僕らは非常に異なる作家なんだ²⁾。」

これまでに上演された作品数から見ると、マクドナの4作品に対して、マクファーソンの戯曲は以下の6作品(初演順)。もっとも、最初の4作は独白形式であり、最近の2作はアンサンブル形式となっている。他にもマクファーソンは、「ろくでなしハイネズ」(*Git Hynes*)と「間抜けのケリー」(*Bunny Kelly*)の珍道中を描いたギャング映画脚本『アイ・ウエント・ダウン³⁾』(*I Went Down*, 1996)も執筆、サン・セバスチャン映画祭最優秀脚本賞に輝いたこの映画に自らも端役で顔を見せているが、紙幅の関係でこの紹介は割愛する。

作品名	初演日	初演会場
① <i>Rum and Vodka</i>	1992.11.27	University College Dublin (Dublin)
② <i>The Good Thief</i>	1994. 4 .18	City Arts Centre (Dublin)
③ <i>This Lime Tree Bower</i>	1995. 9 .26	Crypt Arts Centre in Dublin Castle (Dublin)
④ <i>St. Nicholas</i>	1997. 2 .19	Bush Theatre (London)
⑤ <i>The Weir</i>	1997. 7 . 4	Royal Court Theatre Upstairs (London)
⑥ <i>Dublin Carol</i>	2000. 1 . 7	Royal Court Jerwood Theatre Downstairs (London)

I マクファーソン6作品の梗概と論評

以下の章では初演順に、各作品に著者が寄せたコメントと詳しい作品梗概を紹介しよう。

① 『ラム酒にウオッカ』 (*Rum and Vodka*) 2部

著者の説明によれば、UCD在学中の20歳のときに執筆し、翌年の初演のころは哲学の修士課程に在籍中。商学部の演劇好きな友人ウォルシュ (Stephen Walsh) が見事に台詞を覚えて好評を博した。市内中心部のTCDで再演される運びになったが、折悪く夏の試験直前の週で、ある晩などは若い外人女性1人しか客が入らず、公演中止にして飲みに出かけたという。翌年、河岸のキャフェの地下室でも上演し、観客のなかには大人料金を払って入場した10歳の少年がいたとか。1994年8月にはCACでも上演されたが、スタッフの披露宴に舞台衣装を持っていかれて、公演中止になったこともある。

第1部。飽きっぽい性分で世間との折り合いの悪い「僕」。人間嫌いで自己嫌悪気味の彼が語る3日間の出来事。僕はもうすぐ25歳。20歳のときに結婚し、幼い娘が2人いる。2年越しの交際をしていた両親公認の素敵な恋人がいたが、パーティで知り合った別の女の子マライア (Maria) に泥酔状態を介抱して貰ったのがきっかけで関係を持ち、その子が妊娠したので「できちゃった婚」と相成った次第。職場の戸籍登記所 (registry office) で結婚式を挙げ、僕の悪口を絶対に言わないその子との新婚生活は順風満帆。薄給 (週給180ポンド、つまり月給14万円程度) だが、9時から5時の閑職の役人稼業の定職につき、住宅ローンも組んで新居を購入 (新居が新婚旅行先となった)、気分は高校生のままで、妊娠中も奔放に求めてくる妻との自由で満ち足りた生活を満喫。子ども嫌いの自分がいつのまにか娘たちを愛するマイホーム・パパになっていた。しかし、やがて深夜まで酒を飲んでタクシー帰りの浪費生活が続き、夫婦喧嘩勃発。節約のため自転車通勤を始めたが、盗難防止に柵の内側につないだ自転車を深夜にガチャンと倒してしまうなどの失態で、三日坊主に終わる。僕を飲酒に引き込んだ飲み仲間は、同僚フィルとデ克蘭の2人。食べ残しや空缶、煙草、靴下が臭気を放つ彼

らのむさ苦しい相部屋になんとなく泊まり込んだ。見事な飲みっぷりの酒豪の女シヴォン(Siobhan)と10年来の付き合いのデクランは、いくら飲んでも4時間睡眠で平然としていられるタイプの人間。精神病院の入退院を数年前まで繰り返してきたフィルは、14歳のとき、交通事故死した少年の恋人が少年の墓に投げ込んだ手紙を6年も経った20歳の時に掘り出して、恋人だったその娘の家に深夜3時に押し入り、その手紙を読んで聞かせた変人である。さて、その市役所住民(選挙権)登録課勤務を辞める事件はおとといの金曜日に起きた。前の晩から二日酔いで、昼食に4杯もビールを飲んだため、机に俯せて給料支給の午後4時の到来を待っていたところ、キレて教職を懲戒免職になった経歴を持つ禿頭の上司ミーニー(Eamon Meaney)がやってきて、僕が酒臭いのに気づき、自分の執務室に出頭するように命じた。衆人環視で怒鳴られたのに激昂した僕は机上のパソコン端末を3階の窓から放り投げ、それはゆくりなくも、駐車中のミーニーの自動車のフロント・ガラスを突き破った。神経衰弱を装って同情を引いたり、居直る手もあったのだが、ずっと前からこうしてやりたかったぜ、と捨て台詞を吐いて颯爽と退庁。さっそくパブで飲み始め、後悔に苛まれて落ちこむものの、酒で紛らす。6時にフィルとデクランが来店し、善後策を協議する。この際3人とも植木屋になって役人稼業におさらばさ、などと慰めてくれるが、次第にみな無口になり、僕は絨毯に嘔吐した。別の男に濡れ衣を被せて店をずらかり、他人事のような気がする今日一日を思い起こして、激しく嗚咽した。フィルとデクランは例によって口喧嘩していたが、タクシーで彼らの下宿に向かった。フィルはシヴォンの連れのデンマーク女性と二階に消え、デクランとシヴォンはカウチに倒れ込んだ。午前2時前、僕は外へ出て自宅へ歩いて帰り着き、服を脱いでそっとベッドの妻の隣に滑り込んだ。解雇の件を打ち明けようか迷ったが、酒の勢いで突如、勃起し、熟睡中の妻の寝間着をはだけて、柔らかな乳房や陰部をまさぐり、腕立て伏せの要領で体を浮かせて、潤ってきた妻の中に滑り込んだ…。目覚めると朝、ひどい頭痛と喉の痛みにざらついた口蓋。やがて昨夜の記憶が一気に蘇り、愕然となる。挿入したまま寝込んだのか、無意識のうちにはずしたのか？自分の服は煙草臭く、妻の寝間着を羽織って台所に降りると、「昨夜は遅かったわね」といつもの調子。どうやら抜いたらしい、でなきゃかんかんのはず(She'd have done her nut)。夫婦間とはいえ、強姦まがいの蛮行に良心の呵責は募る。喉を通らぬ脂っこい朝食後、トイレでまた嘔吐。シャワーの水は冷たく石鹼も泡立たぬ。さて本日、土曜日はスーパーへ買出しの日で、たいいてい50ポンド近い買い物をするが、背広には25ポンドのみ。給料の小切手を貰っていないこと、解雇されたことをどうやって打ち明けたものか。やがてニアヴ(Niamh)はベビー・カー、キャロル(Carol)は抱っこして、霧雨の降り出す中、一家で買い物へ出発。紙おむつやトイレット・ペーパー、ヨーグルトなどをカート(trolley)にどんどん詰め込む妻を横目に、ダイエット中だから僕の分の食料はいらない、節約しよう、などと下手な口実を考えるが、勇を鼓して真相を告白し、謝った。蒼白となった妻はツナ缶で僕の目を殴り、目の前が真っ暗。よろけた僕は冷凍食品の中に倒れ込み、妻は絶叫しながらも僕の脚やら腹を殴った。他の客たちが注視し、子どもたちは泣きだし、僕は他人の買い物カートを横転させ、乗っていた子どもは棚に頭をぶつけたようだが、かまわず一目散に逃げ出して、満員のバスに飛び乗り、市内のパブでビールとウィスキーを交互に飲んだ。これで少し落ち着き、フィルとデクランを呼び出そうと思ったが、きっと土曜も時間外勤務だろう。昼が過ぎ、外では警官二人に押さえつけられた大男の浮浪者が、赤ん坊を乳母車に乗せた女に向かって、涙ながらに哀願している現場を目撃。好物のツナ・サラダを求めて店に入ったが、「独占」や「所有権」といったこむずかしい議論をしている客がいたので諦め、いつものパブに入ると、ちょうどフィルとデクランが居合わせた。腫れた目や妻のことを訊かれ、言葉を濁す僕。僕の事務机の上には新しいパソコンが置かれ、上司ミーニーは車を修理して出勤し、事件については口を閉ざしているとのこと。二人はまた共同事業の話を持ち出し、所持金10ポンドの僕に

は金を払わせなかった。妻にはきっとへそくりがあって、食事には不自由しないだろうと想像して、いらぬ杞憂はやめたが、夕方になって別のパブに移ることに決めたとき、妻子のことを思ってホーム・シックになった。パブにはシヴオンとデンマーク女性がいて、僕は客の若い学生たちを眺めていた。そのとき、肩にかかる栗色のロング・ヘア、白いセーター、レギンズ、ブーツ姿の美女が煙草を片手に、執筆中のIRA劇のことを熱心に語る眼鏡の男の話を聞いているのが目に留まった。あの娘なら人生を癒してくれる、と直感したが、すでに酔いが回っていた。通りでは二人組に麻薬を勧められ、酔って返事も出来ない僕は殴られて倒れ、吐いたばかりの自分の吐瀉物で汚れた。気がつくといろとデクランに助け起こされ、両肩を抱えられて朦朧としながら歩き、また嘔吐した。しかし、泥酔客でないことを示すためにゆっくり介添えなしで歩いて、なんとかオリンピック劇場に入った。僕は座席に倒れこみ、目を閉じた。紙コップ入りの冷たい混合飲料、つまり、ラム酒にウォッカのオン・ザ・ロックを渡され、その酒を飲むと体中に刺激が走り、目が覚めた。キスとペッチングでいちゃついてたフィルとデンマーク女性を係員が注意。看護婦や警官、公務員タイプの30代の客が中心で、みんな酔って、階段でこけたり、座席で戻っていた。気味悪いくらいに「アバ」そっくりのビョーン・アゲイン (Björn Again) が演奏したが、物珍しさは半時しか持たなかった。踊っている若者たちの目には僕もただの愚か者にしかみえないのだろうか？マイクをつかんで、解雇は俺の責任じゃないぞ、おれは聡明な男だ、と叫びたかったが、もちろんそんな真似はせず、人混みを押し分けてまた、ラム酒にウォッカのお代わりを貰った、どさくさに紛れて金も払わずに。そのとき、さっきのパブで見かけた美女が、大仰な身振りの35、6歳の男と話をしているのを発見した。彼女は年の頃19か20だろうが、笑うと離れた瞳の目尻に皺ができてもっと大人に見えた。僕は近寄って話声を聞き、うちの女房は浮気してる、ホテルで食事でもどうかな、という男の誘いに、世慣れて如才なく応じているのにますます好感を抱いた。僕と視線が合った彼女は微笑み、僕の方にやってきて手を取った。男は、レズばかりの店だ、とか呟いて去り、嫌な男から助けってもらったことに彼女は礼を言って帰りかけたが、ぼくは彼女の手をとって、「僕の人生を癒してほしい、君は美しい」と言って、いきなり泣き出したので、みんなの注目を集めた。彼女は僕を女子洗面所まで引っ張って行き、個室に入るや、大丈夫なの？と訊いた。自己憐憫を楽しみながら涙は止まらず、彼女の腕につかまると抱き締めてくれ、彼女の好意の心配をよそに、内心では「やあ、いいおっばいさん」という声が聞こえた。彼女は同伴の友人たちとともに僕を連れて劇場を出た。男友だちたちはボヘミアンの映画制作者風、女友だちたちは岩間に挟まった猿の群れのようなようだった。彼女はつないだ手をずっと離さず、コートを受け取って、仲間と別れを告げ、言葉のいらぬ絆が二人にあるのが分からないのか、といった感じで、啞然とする連中を僕は睨みつけた。彼女はタクシーを呼び、運転手にクロナーフと行き先を告げた。両親はいま留守だと言う。手を上げて車を止めようとする歩行者や、喧嘩、路上で寝こんだ酔客などを、窓越しに見やりつつ、雨の降り出すなか、タクシーは北へ向かった。干潮の浜辺にはゴミが散乱し、雨が激しくなった。6ポンドの運賃は彼女が払い、大邸宅に入った。居間は緑の絨毯の豪華なスイート2間で、僕はラム酒とウォッカ、彼女はビールを飲んだ。やがて彼女は僕を二階へ導き、僕は大便をしてシャワーを浴び、鏡に映る撲殺死体のような自分の顔を見た。体を隅々まで磨き上げ、タオルで拭いて、汚い服の代わりに彼女のローブをまとして寝室に入った。彼女はベッドにいた。身震いしてローブを脱ぎ、彼女の隣に入った。彼女は僕の上に乗ると、うなじにキスし始め、僕の一物は膨脹し、彼女は笑ってそれをつかんだ。名前を訊くと、「マヴォーニー (Myfanwy)。ウェールズの名前よ」と答えた。

第2部。目覚めたとき覚えていたのは、崖から転落するような恐怖感。時計の針は9時45分。12時間前の昨夜は家へ帰ろうと考えていたのに、マヴォーニーは背中を向けて眠っている。赤の他人をべ

ッドに誘うなんて、なんたるふしだら娘だ、妻帯者の僕のことはどうでも、せめて妻のことを気遣ってしかるべきじゃないか。またまどろみ、目が覚めると11時。ローブを羽織って、自分の服はすべて一階の洗濯機に放り込み、鎮痛剤を探しだし、ビールを開けた。白黒の家族写真の飾られた他人の家で他人のビールを飲んでいて、侵入者の気がしたが、ピアノも弾いてみた。フィルとデ克蘭の下宿に泊まったものと妻は思っているはず、家へ帰ったら、すまないという気持ちを必死になって示そう、しかし、もう職場には戻れない、それにスーパーで妻は僕を殴った、あんまりな仕打ちだ。二階へ戻るとマヴォーニーはまだ熟睡。服は洗濯中なので、ピンクのトラックスーツ・ズボンとTシャツ、靴下を拝借して戸外へ出た。付近を散歩して浜辺に出て、入り江を眺めながら店で酒を飲んだ。やがて元気が回復し、ゆっくりと屋敷に戻った。中へ入ると台所からラジオの音。僕の着ている女物の衣装を見て吹きだし、洗濯物はもうすぐ用意できると教えてくれた。ビールを勧め、外出先を尋ねて、飲み過ぎよ、と心配し、上手なピアノ演奏は誰だったの、に始まり、僕の事を訊き始めた。名前はマイケルと答えた [本名かどうかはテキストからは不詳] が、住所と勤務先は返答できなかった。逆に僕のほうでも彼女のことを訊いた。トリニティ大学卒業生で、イタリア語とかの学位があり、ビジネスの学位も修得希望。飲んでないから二日酔いはない、とのこと。衣類を乾燥機に入れて貰い、ビールとサンドウィッチで腹拵え。彼女は膝に乗ってきてキスし始めたが、その気になれず、昨夜と態度が違うわ、もうあたしは美しくないの、と訊くので、いまは疲れているのであとで、と逃げた。〈あと〉では両親が帰って来るそうだし、彼女の好意をつなぎとめるべく、居間の床で30分セックスをした。ズボンにアイロンがけをして貰うと、もう1時半。僕は焦ったが、彼女は車庫から小型車「ミニ」を出して、1時50分に彼女の好みのパブで酒のみ、支払いは彼女持ちで2時半出発。メリオン・スクエア、スティーヴンズ・グリーンを散策中も、いろいろ訊いてきたが、僕が言葉を濁すのでうんざりした様子。レストランで食事をしながら、この2日間の出来事を話して聞かせるとやっと満足してくれた。妻帯者だろうと娘がいようと構わない風情。お役に立てることがあるかしら、という問いに、ただずっと勘定を持ってくれればいい、と答えたときには、笑って抱きついたものの、さすがに涙ぐんでいた。戸外のテーブルでコーヒーを飲み、奥さんに電話したら、という提案は、気後れと後ろめたさを理由に断った。今夜のラトマインズでのパーティの誘いには応じた。やがて彼女の友達5人組がやってきて、僕はただの相席客と思ったらしく、紹介を聞いて意外な面持ち。5人は、ナチス親衛隊SSの士官のような恰幅のよいルパート (Rupert)、紐付き眼鏡のずんぐりしたファーガル (Feargal)、モデルのようなソーシャ (Sorcha)、暗色クリーム顔色のジェイン (Jane)、なるべくアイルランド語を喋ろうとするシニード (Sinead)。演劇学校で『エディップス王』の練習を始めてから自己洞察が深まり、現代演劇のすべての要素はギリシア悲劇・喜劇のなかに胚胎する、と熱弁を振るるルパートに、演劇と現実の人生とどんな関わりがあるのか、と僕が質問すると、彼女の手を始終触りながら、明快な即答どころか、10分も退屈な話を延々と続け、喜劇の面白さの理由を、あるロシア人のユーモア3段階理論を援用する分析で説明しだす始末。モデルのソーシャは、シャンプーの広告に出たが、後頭部のみで顔は映っていないらしい。クリスティ・ターリングトン (Christy Turlington) はマントヒヒみたいだと、ファーガルが言うと口論になり、議論は、中央アフリカのルワンダ共和国から、海外にいる友人たち、妊娠中の知り合いの女の子、ピンク色の紐をつけているトリニティ大学の講師、アルバートと連合政権を組んだスプリング (Dick Spring, 1950-) の変節⁴⁾などに及んだ。頭の出来はこいつらと同じくらいだと思いつつも、意見がまとまらず所在なげに僕は座っていたが、飲みに行こう、と彼女にやっと声をかけた。すると一同賛成で、バーへ向かった。彼女は僕の手を握っていたので、知人に見つからないかびくびくもの。おごりのラム酒にウォッカを飲み出すと気分が良くなり、浅黒い肌のジェインに黒人に関するジョークを言うと怒りだした。やがて

ファーガルが元・彼女との間の子どもを迎えにジェインと立ち去った。僕はモデルのソーシャに、モデル稼業をしてると白痴グラマー (bimbo)、つまり、見栄えの良いモノ扱いされるのか、と訊くと、私はそういう路線じゃないわ、と一蹴され、うんざりした。ルパートは大学同窓の仲間と共同執筆中の映画脚本の話をし、パリを舞台にフランス語で制作すれば素晴らしい、ご当人は喋れないが字幕を付けるらしい。彼はまた、自分はゲイではないけれど女になりたい、洞察力に優れる女たちが治めれば、世界は混乱しないで済む、と語るの、あんたはゲス野郎だ、と言ってやったが、みんな冗談扱いした。今夜出かけるパーティはそのルパート主催だった。彼らは会場準備に出かけ、夕暮れのパブは人気が減った。僕と彼女は再び「ミニ」に乗り、彼女の金でタバコを2箱買った。パキスタンで歴史書執筆中という彼女の兄の留守宅に寄り道し、高価なシャツ、上着、ネクタイを選び抜き、洒落た衣装に衣替え。着替えの最中、彼女は僕の一物を触りだし、迷ったが、応じた。ウォッカ1瓶を拝借して10時に車に戻り、ルパートの一人住まいの屋敷に向かった。すでに庭では酒盛り、玄関では抱擁、裏口では麻薬、台所ではスープ調理中の男に背後からくつつく女、テクノ・サウンドに合わせて乱舞する連中などが入り乱れるなか、マヴォーニーは縞模様の袖なしシャツにショート・パンツ姿で素晴らしいダンス、ルパートは精神病院を出たばかりの男のようなダンス。隅に座っていたカップルと一緒に僕は酒を分けて飲み、盛り上がりたくないこのカップルを元気づけるために酒を注ごうとしたら、瓶は田舎野郎たちが勝手にくすねて、カウチで美人相手にだべっていた。僕が近づくと、瓶を股間に挟んで隠そうとし、僕は瓶をひったくって、振り回すと瓶底がそいつの鼻柱に当たったが、割れはしなかったの、別の野郎の側頭部を殴ると、パンと割れてガラスが飛び散った。マヴォーニーを探したが、台所にも階段にもトイレにもいない。しかし第3寝室の明りが消えていた。点灯すると、彼女のシャツははだけて、ショート・パンツは足首辺り、ルパートの頭は彼女の股間にあり、彼は床に跪いて一人で射精しようとしていた。まず閃いたのは、こいつは僕の精液をなめている、という考え。彼女は僕を見て彼を蹴りとばしだしたが、相手はしっかりとしがみついている。僕は笑い、彼は「おっぱいを揉め、イきそうだ」と言い、僕の姿を見たときにイってしまった。彼女は頭を抱え、彼は毛布で裸体を隠し、僕は「さよなら」と告げた。一階では音楽が途絶え、止血用のタオルを居間から運んでいた。玄関先にあった彼女の上着から財布を抜いて外へ出た。暖かな夜で、財布には20ポンド。タクシーを呼び、市内を突っ切ってラヒニー (Raheny) に着いた。12時ごろで店は混んでいて、2歳くらいのむずがる女の子を抱いた四十男が連れの男に、女房に殺されちまうよ、と漏らすのを聞いて俄然、食欲が失せた。我が家に向かって歩き出した。そと玄関ドアをあけて墓のように静かな二階へ上がった。娘たちの部屋へ行き、床に座って二人の寝息を聞いた。二人の金髪と白い木綿のパジャマ。ちっちゃな手。とうてい耐えられなかった。

② 『善良な泥棒』 (The Good Thief) スチュワート・パーカー (Stewart Parker) 賞受賞

初演の標題は『イエスの^{ともしび}灯火』 (The Light of Jesus)。標題が災いしてか、客足は悪く、劇場使用料などで大赤字。スライドを効果的に使用したが、劇団「^{フライ・バイ・ナイト}夜間飛行」旗揚げ時からの俳優の友人ヒーリー (Kevin Hely) が台詞の順序を間違えたりすると、対応のしようがなかった。事実、^{プリヴェュー}試演なしに迎えた初日に彼は台詞を忘れ (dry [up])、しばらく床に座り込んで、関係者をはらはらさせたが、観客は演技の一部と思ったようだった。テンブル・バーの新しい劇場での再演 (標題を『善良な泥棒』に変更) は、従兄弟のプロ俳優キョー (Garret Keogh) とその親友の映画編集者ドイル (Se Merry Doyle) をスタッフに迎え、劇作家フラ

ンク・マギネスが柿落としの挨拶をしたが、劇評も客の入りも総じて芳しくなかった。その後、観客数と無関係に収入が保証される方式の文化振興局後援の全国巡演に恵まれ、簡素化をはかってスライド使用はやめた。デリー公演では、リング・ジュースが手に入らず、本物のウィスキーを舞台上で開栓してキョーが演技したこともあったという。

僕は親分のマリー (Joe Murray) に雇われた殺し屋 (thug) だった。もともと、恐喝や放火、威嚇発砲だけを行なった。恋人グレタ (Greta) は僕を捨てて、このマリーの情婦となった。女は権力に弱いもので、僕もよく彼女をおちのめしていた。グレタは誰とでも寝る女で、ちょっと前に他の男が突っ込んだところに突っ込むなんてうんざりだった。この日も僕は、靴修理人の男を追い回して階段の吹き抜けを昇り降りした。特殊技能のある奴は嫌いで、その男も気絶するまでリンチした。バーで馴染みのカップルとビールを飲みながら愉快に話していると、グレタの姿が見えた。ネックレスをつけ、長年英国暮らしをしたことがある男ディレイニー (Harry Delaney) と一緒に、酒でもぶっかけてやろうか、とも思ったが、愉快的気分だったのでよし。きっとカー・セックスでもして、またマリーの一物をしゃぶりに舞い戻るのだろう。二人が出ていった後、二階からマリー親分が下りてきて、箱入り娘のように大事にしているグレタがいないので心配している。マリーは肛門性交が好きで、現場を目撃したこともある。僕は変態 (messer) ではないからそんな真似はしないが、グレタがこんなやり方に満足しているのか、気がかりだ。マリーはグレタの居場所を尋ねたが誰も分からず、僕のところへも来た。見かけたが、居場所は知らない、と答えると、何も言わずにいなくなる女なのか？と、元・恋人の僕に厚かましくも尋ねる始末。さて、この出来事がこのあと数日の騒動 (mayhem) の発端となった。僕はマリーと、強盗罪で15年の刑期を終え「年とともに丸くなった」とは聞くものの、プロの仕事ができる古参の悪党ローク (Vinnie Rourke) と飲んでいて。戻ってきたグレタは、マリーの問いには答えず、テキーラを飲んで煙草をふかしていた。ロークとその子分のパーカー (Seamus Parker) は一発やりたげにグレタを眺めていた。マリーは、住所を書いた紙切れを僕によこした。食料輸入業者向け賃貸倉庫を多数所有するミッチェル (Patrick Mitchell) という男の住所で、市内で発生した大規模強盗のやばい盗品 (dodgy gear) を倉庫に抱えているとの評判で、以前からマリーはその倉庫に放火すると脅迫し、毎月1,500ポンドをゆすってきたが、不景気のためミッチェルは猶予 (leeway) を申し出ている。マリーが断ると、ミッチェルはIRAの又従兄弟の話を持ち出し、僕が脅し役に選ばれた次第。前金100ポンドを貰って、酔っ払って帰宅し、9時ごろ起床。二日酔いを薬と水風呂で覚まし、レモンと^{クローブ}丁子入りホット・ウィスキーで暖まり、弾倉が割れた手製の散弾銃と、フランス脱走兵へのとどめの一撃用だったときくウェブリー拳銃の準備をした。拳銃は射程6メートル弱で、未使用と思えるほどきれいだった。威嚇だけで十分なはずだったが、なぜだか散弾銃には実弾を装填し、拳銃はジーンズの尻ポケットに忍ばせ、バラクラヴァ帽にアノラック姿で、雨の中、車で目的地に出かけた。玄関ベルを鳴らすとドアが開き、むこうにもバラクラヴァ帽の男がいて、棍棒で僕の顔を殴りつけるや、腕をつかんで引きずり込み、後頭部を蹴った。帽子を脱がされ、散弾銃は奪われた。僕を襲った男のほかにも、自動小銃をもつオーバーオール服の男が階段にいて、僕が威嚇する予定だった禿頭で太ったミッチェルが妻と3、4歳の娘と台所に避難していた。マリーの差し金かと訊かれ、そうだ、しかし威嚇だけが目的だ、と即答した。階段の男は、殺しはしないが、脚を撃つ、不測の跳弾 (ricochets) が心配だから、裏庭に寝そべってくれ、と指示した。しかし、ミッチェルが銃声と警察沙汰を恐れてもめたあと、銃ではなく大ハンマー (sledgehammer) を使うことで決着した。余生を不具者になって送らないためには、ズボンの拳銃を使うし

かない。ミッチェルが鍵を取りに僕のそばを通りかかった一瞬のスキについて、狙いも定めず拳銃を撃つと、僕を最初襲った男の尻に当たり、そいつが僕の上に倒れてきたのでピストルを床に落としてしまった。階段の男は小銃を連射し、側柱や壁、そしてミッチェルの背中を撃った後、空薬包が詰まる故障が起きて作動しなくなった。僕は奪われていた散弾銃をつかんで、階段の男めがけて夢中で撃った。男は倒れ、即死したようだった。最初の男の頭を銃で叩いて気絶させ、床の拳銃も取り戻した。ミッチェルは出血多量だったが、まだ息があった。逃げようとする彼の妻子を引っ張り戻し、震える手で殴って黙らせたが、自分もまた脚がわなわなとして床にへたりこんでしまった。室内の電話で、マリー親分に連絡を取り、事情を説明すると、手出しせずに妻子を見張り、中間の到着を待て、との指示。階段の男の死を確認して、彼の銃から弾薬を奪った。気絶していた男が意識を戻し、連中はお前を殺すぞ、とほざいた。「連中」というのが、奴の仲間なのか、僕の仲間なのか、分からず不安になった。僕の到着が事前に漏れていたということは、ロークの密告かもしれない。やがてロークともう二人が車で到着し、上着の中に隠した拳銃を彼が調節するのが、窓から見えた。死の危険を察知した僕は逃げ出そうと裏庭に出たが、ロークの手下のブリーン (Chris Breen) に銃で脅され家に戻った。ミッチェル夫人は後ろ手に両手を縛られ猿轡、娘は夫人にしがみついていた。尻を撃たれた男の息の根を止めたロークが、ブリーンに僕を射殺させようと命じた瞬間、上着のポケット越しに拳銃を撃つと、ブリーンは崩れ落ち、啞然としていた。ロークはすぐさま逃走した。3人目の男に動くな、と警告して、僕はこの母子を連れてガレージに行き、大型ローヴァー車にいっしょに乗り込ませて、出発した。うまく助かったのですっかり上機嫌の僕は、マリーからグレタを取り戻して新生活を始めよう、などと考えていたが、パトカーのサイレンが聞こえたので早く市外へ逃走せねばならない。11時のニュースには出なかったが、時間の問題だ。二日酔いが襲ってきて、待避車線 (lay-by) で車を止め、外に出て嘔吐した。ずっと縛られ猿轡状態の夫人に、僕は状況説明をした。顔を覚えられた以上、夫人を解放することはできないし、自首するつもりもない、裏取引で警察に密告する事態を恐れて、殺し屋仲間は僕を狙うだろうし、関わりを持った夫人も標的になるだろう、つまり、僕らは一蓮托生の運命にあるのだ。しかも、僕はもともと威嚇だけが目的だったのであり、面倒な事態にしたのはミッチェルの責任であり、事故とはいえ、彼を撃ったのもその手下である、その連中も僕らを追跡するだろうし、警察も無論、然り。したがって、僕に協力するしか道はないのだ、と。その後、紐と猿轡をはずされた夫人は娘を膝に乗せ、まだ捜査網の敷かれていない地方を車は進んで行った。脚を負傷するのと、殺人で逃走するのと、どちらがましだったのか、グレタはどう思ってるだろうか、などと思案しながらも、マリーがグレタを肛門責めする絵が浮かび、思わず悪態を漏らし、夫人のことではない、と詫びた。僕には40ポンドしか持ち合わせがなく、夫人は車の小物入れ (glove compartment) の地図に挟んだ夫の銀行キャッシュ・カードを使って、200ポンドを支払機から引き出した。夫を殺害されたばかりの妻としては冷静沈着な態度で、逃げる素振りはなかった。12時40分にバーに入り、昼食客で混雑する店の窓際で新聞を読むふりをして目立たぬよう酒と軽食。娘にはチップスとアイス・クリーム、夫人もスープにサンドウィッチを浸して食べ、ブランディも飲んだ。「お猿さん」呼ばわりされるその娘はおとなしく、行儀がよかった。今後の予定は、スライゴウにいる不動産業の友人ジェフ (Jeff) を訪ね、潜伏先を提供してもらうことだった。駐車してドライバーが離れた「フィエスタ」に近づき、石を包んだ上着で運転席の窓ガラスを割り、点火ロックから電線を抜いてすぐにエンジンを始動させ、バーに向かった。意外にも、夫人はすすんでその盗車に乗り込み、西を目指した。道路封鎖の際の対応策として、夫婦を偽装することとし、娘の名前を訊くと、ニアヴ (Niamh) だった。1時半のラジオ・ニュースで事件が報じられ、「氏名不詳の死者3名」の報道だった。ジェフはボイルの町 (Boyle) へ妻と4人の子どもとともに数年前に引っ越していたが、広域

の物件を売買していた。シャノン川辺の家ではグレッタも呼んで遊んだことがあった。かつて、パーク (Burke) という地方議員が、平屋住宅の建築許可 (planning permission) のために「管理費」の名目で5千ポンド (80万円) の賄賂を暗に要求し、拒絶した2日後、彼はパブのトイレで襲撃され、前歯を1本折ったことがある。パークの仕業らしいというので、彼はダブリンの僕に電話を入れ、駆けつけた僕は、パークを密偵し、田舎の自宅から看護婦の妻が5時に外出し、当人もゴム長靴 (wellies) と杖で現れ、土堤を眺めていた。僕は手を振り、愛想のいい笑顔で近づき、道案内を請うように話しかけると見せて、思い切り蹴とばし、杖でもさんざん殴った挙句、自宅のなかに引きずり入れ、台所のある場所を訊いた。脅すには刃物のある場所が効果的だったからである。——ミッチェル夫人がトイレ休憩を所望。ニュースでは、ミッチェルの死亡と逃走犯3人の目撃証言が報じられた。僕の車は、アシがつくことを恐れた仲間が乗り逃げしたようで、これも好都合だった。トイレから戻った夫人に、無事を誰かに伝えたいなら電話してもよいが、居場所は言うな、と告げた。豪雨のなか、ポイル到着。ジェフの事務所に入り、単刀直入に事情説明すると、彼は援助を約束してくれた。フィエスタではニアヴが車酔いして吐いていた。夫人とジェフの初対面の呑気なやりとりで奇妙な感じを抱きながらも、車は中央郵便局 (GPO) 並の大邸宅に乗りつけ、室内を案内するジェフをよそに、僕は拳銃を胸に壁に凭れていつの間にか眠り込んだ。(シャノン川に面するこの屋敷は、かつてグレッタと過ごした思い出の場所だったのだろう。) グレッタの姿が夢に浮かび、11時に目覚めた。ジェフは妻マリ (Marie) と子どもを連れてやってきており、ミッチェル夫人とマリは早くもピクニックを計画。新聞報道では、事件はIRAの仕業で、警察は情報提供を呼びかけ、僕らの姿の目撃者は皆無。余り引き合いのない売家の車庫に盗難車フィエスタはしまわれ、リートリム州にいる僕らと事件をつなぐものはない。庭では夫人たちがピクニック、ニアヴはジェフや他の子どもとはしゃぎまわり、女の赤ちゃんは毛布の上で寝返り。加わった僕は、その赤ちゃんに指をニギニギして貫つたり、膝の上であやしたり。しかし、新聞報道について夫人に尋ねると、とげとげしい態度に変わり、あるところに電話した、と言う。二人きりになったときに、電話の相手は一体誰なのか、僕が乱暴に迫ると、パリにいるニアヴの父親だと意外な告白。夫人はミッチェルと結婚後、この幼馴染みと密会。(そのあおりで、夜の営みを拒まれるようになった夫は、妻子を英国に転居させる別居を決意、それでヤクザのマリーとの関係を清算しようとしたらしい。) 旅の多いフリー・ジャーナリストの不倫相手は、夫人との結婚に難色を示し、夫人もミッチェルの財力に当面は頼っていた。居場所は教えなかったが、彼はアイルランドに来る、という。道理で、夫の死を嘆かない理由が腑に落ちた。浮気女だと分かると、マリーにのしかかられるグレッタの姿が浮かんだ。ミッチェル夫人は、その名で呼ばれると笑い、アナ (Anna) だと答え、午後はみんなで酒を飲んだり、子どもと水遊びで過ごした。夕方ジェフ一家は去り、寝込んだニアヴのそばで、愛人は娘の顔を3度しか見てないこと、ミッチェルは我が子と思いついていたこと、夫の2週間の留守中に妊娠したこと、取調べを受けずに出国したいこと、などを囁いた。二人の寝息を聞いていると僕は心が真っ白に洗われる気がした。だが、未明にガラスの割れる音がして目が覚め、真っ暗闇の中、玄関に行くと、ドアが開いていた。明かりがつくと同時に頭を殴打され、両手を縛られて素裸にされて座っていた。パーカーが平手打ちを浴びせ、ロークはこれ見よがしに3発、腹や顔を殴り、おまけに僕の睾丸をきつく握ったので、変態野郎、と言うと蹴り飛ばされ、一瞬失神した。バケツの水をかけられ気がつくと、マリー親分が座っていた。口を開くと折れた歯が抜けた。居所はグレッタから心当たりを聞いて突き止めた、彼女は俺に惚れているからな、と語るマリーに、グレッタは誰に惚れる女でもないことが分らん奴だ、と思い、ニヤリとした。しかしジェフは、簡単に口を割って友人を売るはずがないので、一家惨殺の可能性が頭をよぎった。どうやら(一瞬脳裏に浮かんだ) ミッチェル母子も僕がリンチを受けている間に消されたらしい。射殺を観念して

いると、マリーは意外なことに、グレタの懇願だから命だけは助けてやる、逮捕後、黙秘や作り話をすれば証拠不十分で懲役10年以下で決着するだろう、裏切れば命はない、と言い残して立ち去った。やがて午後、警察が到着し、僕は入院。黙秘を続けた後、ミッチェル殺害とは無関係で、ただ妻子誘拐の運転手役だったこと、共犯の英国人たちに裏切られて殴られた、と偽証した。焼死したジェフ一家の放火は失火とみなされ、ミッチェル母子の遺体も上がらず、逮捕歴もない僕は、裁判ではただのまぬけ野郎扱いだだったが、それでも10年の刑を食らった。自分でもなにが悲しいのかわからず、入浴中のグレタの姿や、出所したらマリーとロークを殺してやる、といった考えが浮かび、やがて無感覚に陥った。ある日、同じ牢獄の部屋に窃盗犯で20歳のヴァンダー (Tom Vander) という男が入ってきた。しばらくして懇意になった彼の話では、他人の家に侵入し、その風呂やビデオ、本などの私物を勝手に使うスリルが楽しいのだという。僕は自分の事件の顛末を話し、互いの恋人の話をした後は、二段ベッドの上下で猥談をしながらお互いに自慰にふけた。やがて夏がきて微罪の彼は一足先に釈放され、婚約後、英国からの文通も途絶えた。そばにいて幸せにしてやれる相手がいないのは残念だった。いま、僕はアイルランドを離れ、ほとんど家に閉じこもって飲んでばかりいる。ミッチェルとニアヴ、ジェフ一家のことや、去年見かけたグレタのことが心に浮かぶ。ひどい雨の日、倍ほど年の離れた男と一緒に車から降りた彼女にかけようとしたが、かけよりはしなかった。

暴力と痴情の安っぽいギャング映画並の脚本、と退けることもできようが、ジェイムズ・キャグニー主演の映画のような哀感、そしてアイルランドでは珍しいロード・ムーヴィ的要素を備えた作品である。

③ 『この菩提樹の四阿』^{あずまや} (*This Lime Tree Bower*) 2部 マイヤー=ホイットワース (Meyer-Whitworth) 賞, ピアソン (Pearson) TV座付作家賞, ギネス「独創」賞受賞。

標題はコールリッジ (Samuel Taylor Coleridge, 1772-1834) の詩集『シビルの詩片』 (*Sibylline Leaves*, 1817) 所収の1797年の詩「この菩提樹の四阿, わが牢獄」 (“*This Lime Tree Bower My Prison*”⁵⁾) から取られている。1797年6月、25歳のコールリッジは友人たちの来訪を別荘で待っていたが、到着の日の朝、事故に遇って歩くことができなくなった。そんなある夕方、庭の四阿で拵えたという。全体で3連78行からなる詩で、マクファーソンの引用は2連冒頭の5行とこの詩の最終行である。エピグラフとして添えられているが、戯曲内容との関連性は薄いようである。

レイ役には名優マレン (Conor Mullen) ——アイルランドの電話自動応答音声の吹込者——に依頼し、ジョーとフランクはオーディションで選出した。フリンジ演劇祭では好評を博し、役者にペイも支払えた。やがて、ロンドンのエイジェント、マーストン (Nick Marston) の目に留まり、ダブリンと同じキャストでブッシュ劇場でも公演、初日には彼の父と2人の姉妹もかけつけ、大好評だった。出演した役者たちにはこれを契機に大手から出演依頼も舞い込んだという。マクファーソンは、この芝居を翻案して『塩水』 (*Saltwater*) として自ら監督して映画化し、ベルリン映画祭ではCICAE賞を受賞している。

登場人物は、17歳のジョー(Joe)、22歳の兄フランク(Frank)、30代はじめの大学講師レイ(Ray)の3人。全編を通して3人とも舞台にいて、互いの言動を意識している。

ジョーの独白。学校をサボり(on the mitch)喫煙したために退学処分となり、あらたに転校してきた不良少年デイミアン(Damien)に惹かれた様子が語られる。彼に誘われて、ある金曜日に学校をサボって自転車で郊外を放浪。途中、彼の知り合いの2人の少女に出会い、そのうちの金髪のタラとは14歳のときに関係を持ったことがあり、誰とでも寝る女だとデイミアンは教える。自分は母親が16歳の時の子だと言い、いかす母親だからぜひ会ってくれ、と自宅へ案内。プロテスタント居住区のOld Strand Roadの彼の家で、一緒にピーナッツ・バター・パンを食べてMTVを見てみると、小柄な体で厚化粧にノーブラ、ジーンズにスパイク・シューズ姿の母親が帰宅。続いて、見知らぬ男と大型犬が入ってきて、男はシャツを脱ぐや庭の池の中にズボンのまま入り、水中に頭を突っ込んで「畜生」と叫び、酔ってるだけだから気にするな、と話す。ジョーはデイミアンの家を辞したが、下校時間にはまだ早いので馬券売りの「間抜けのサイモン」の前で時間を潰し、帰宅した。父親は庭で自動車の修理をしていた。ジョーは二階に上がって、昼間会った2人の少女が、核戦争で他に男は誰もいなくなったので、代わる代わる「お相手」をしてくれる夢にふけりながら、自慰をした。姉カーメル(Carmel)は恋人のレイが訪ねてくるのでシャワー中だった。レイは大学講師で、学術雑誌「倫理」に掲載された自分の論文や、豪華な車を自慢していた。父親や兄ともレイは仲がよく、一緒に酒を飲み交わしては政治論議や他人の悪口を言い合っていた。

レイの独白。寒い10月の朝、目覚めると、ベッドには教え子の女子学生の一人が寝ていた。名前も思い出せないその学生がぼっちゃり体型だったので、寝姿にまたむらむらしかかる(a passing yen)が、12時からの担当講義があるので、そと抜け出してサーブ社の愛車で出講。学者仲間と顔を合わせずに済む学生会館のバーで飲む習慣が身につく、昨夜もいつしか人事不省に陥って人前で嘔吐して、グロに足を滑らせて転ぶ者も出るなどの醜態。車で学生に送って貰ううち、最後に前述の女子学生と二人きりになり、彼女の下宿で介抱して貰ったのはいいが、夜中3時に目が覚め、事に及んだ次第。12時の講義にはなんとか間に合いそうなので、俗に二日酔いには迎え酒、とばかりに、またぞろ学館バーで昼前から飲み始める始末。講義の方は、うまくごまかして無事終了。出席学生は23人ほどで、他の学生たちは二日酔いで授業欠席。夕べあんなに酔払った教師の俺が姿を見せているというのに、恩知らずめ、とぼやく。大便をすませ、研究室の机に俯して居眠り。アパートでディラン・トーマス(Dylan Thomas, 1914-53)の詩「ミルク・ウッドの下で」の録音を取りしきる変な夢を見た。やがて3時、研究室のドアをノックする音で目が覚める。例の女子学生がやってきて泣き出すので慰め、静かなパブに誘って、心配ないよ、と宥めつつも、内心では馬鹿な奴、と不快感。出来ちゃった(have a bun in the oven)ら凄いことになるぞ、と思いつつ、彼女を7時に街まで車で送る。このあと、恋人カーメルと会う約束だからだ。彼女の兄とビールを飲んで無駄話に花を咲かせ(Shoot the shit)、みんなが寝静まったころ、カーメルの寝室へと二人で向かうのが習わし。避妊具も張り裂けるくらいのセックスをしたい、と思っていた。

フランクの独白。金曜日のこと、間抜けのサイモンが「俺の妹の倅」と呼び習わす甥(いつも手をポケットに入れ、頭部が異常にでかい)をつれて午後2時に来店。父親はサイモンに2千ポンド(約32万円)の借金があり、これまでは猶予していたが、いよいよ取り立て催促に訪れたのだった。父親のポンコツ車は売れても2百ポンドが関の山で、返済の目途はない。サイモンはフランクに仕事の口を斡旋するが、この店の手伝いがあるからと断る。しばらく店に居座った後、二人は金も払わずに威張って出ていく。このとき、ある企てが彼の心に浮かんだらしい。金曜日によく来る、髭面の男——当局への身柄引渡ししが難航している、北アイルランド出身の狙撃兵だ、とか、仮釈放中の強盗犯だ、

とか世間では噂されている——が、例によって現れたとき、「銃を用立ててほしい」と、彼は勇を鼓して依頼したのだった。

ジョーの独白。 幼馴染みのファーガス、ノエルとともに難破船の残骸のある岩場に遊びに行った。一説ではその船は、アイルランド娘に恋をしたイギリス人船長がIRAのために銃を密輸した船で、娘の婚約者が<ブラック・アンド・タンズ>に密告したため、娘とIRA一味は逮捕されたが、娘がランプを倒して火事を起こして異常事態を知らせたため、船長は急いで退散しようとして、難破。船長は溺死し、娘は絞首刑となったという。また一説では、ダガン (Vinty Duggan) という漁師が、単に酒に酔って坐礁させてしまったただけだ、ともいう。そのとき、ジョーの憧れの少女デボラが海辺の遊歩道を、ある男と散歩しているのを目撃してがっかりする。ゲーム・センターで不人気の射撃ゲームをやってうちへ帰ると、いつものように父と兄、姉とレイがいて、男3人は飲んで喋っていた。ジョーはシャワーを浴びて、兄のスリラー小説を借りて少し読んで眠りについた。深夜3時、フランクが酔っ払って上がってきて、ゲラゲラ笑っている。理由を聞くと、月曜に「間抜けのサイモン」の馬券売り場を襲撃するんだ、とフランク。酔っ払いの戯言と聞き流して、また眠りに就くジョー。

レイの独白。 週末、カーメルとドライブしてロングフォードで昼食、夜にはゴールウェイに到着し、グレイト・サザン・ホテルに宿泊。知性と気品を備え、うぶで無垢なカーメルといると、自分の魂が腐っているような後ろめたさを感じる。ホテルのプールで一泳ぎし、豪華な食事を味わい、疲労と満腹感でセックスどころではないけれど、ホテルに泊まったからにはやることはやらねば。(で、すぐ就寝して早起きした。) 翌日曜日には帰宅。カーメルを送った後、レイガン (Tony Reagan) 教授とパブで、哲学科が招聘している高名な哲学者ケーニヒスベルク氏 (Wolfgang Konigsberg) の講演会の打ち合わせ。3つの講演だけの予定なので、質疑応答の時間を設けることを提案するが、その件は月曜の学科会議で、と教授。月曜の朝、建物の最上階にある研究室に到着。誰も読まない著書の執筆にレイは取り組む。学科会議では、誰がケーニヒスベルク教授を空港にお迎えに行くか、で30分も紛糾。教授の哲学体系に造詣の深いミーハン (女性) 講師は、着任後間もないので学科代表者としては適任でない、ということで、結局、3台の車に分乗して学科教員6人総出のお迎え、というばかげた結論に。質疑応答の件は、90歳近い高齢の教授の負担を考慮して控えるべき、と主張するミーハンと、それは非民主的であり、討論の重要性を強調するレイとが激突。(男に相手にされないから世間を逆恨みしてるのだ、いっそ、会議のテーブルに上がって、脱糞でもしてやろうか、と過激なことを考えるレイ。) 結局は、レイの意見は通らず、激昂して席を立ち、午後の講義の休講を宣言して出ていく。こうして、ちゃっかり半ドン (Half day) にできたのを、内心で喜ぶレイ。

フランクの独白。 開店前に例の髭の男がやってきて、銃をくれた。銃身は鋸で真ん中から切られ、銃床の木は欠けて壊れているような使用不能の代物で、弾薬筒もなし、だったが、用がすんだら処分してくれ、と言って男は立ち去った。一旦、銃を二階の部屋に隠し、いつものように父親と仕事をし、客足の減った2時半に二階に上がり、弟の帽子に覗き穴をあけ、銃をズボンに押し込んで外出した。通りは閑散としていて、彼はサイモンの馬券売り場の襲撃に直行。店内にいたサイモンや従業員、客たち全員に、床に寝そべるように命令し、サイモンの股間に銃を押しつけると、彼は恐怖で失禁。カウンターによじのぼって監視しつつ、まずレジから現金30ポンドを、次に金庫から持ってこさせた2つの大きな封筒をポケットに押し込み、サイモンの顎下に銃を押し当て、ズボンを脱がせた。そして通りに人通りがないのを確認して逃走。サイモンの甥のチャーリーが追走するのが聞こえたが、塀をよじ登り、銃をズボンに隠して、逃げ場を考えた。行きつけでないパブに飛び込めばうさん臭く思われる、人込みに紛れるのに絶好のスーパーはまだ遠い。そしらぬ顔でゆっくりと歩くのが一番だが、チャーリーに発見されればつかまるかもしれない。ちょうどそのとき、レイの車が近づいて

フランクを乗せてくれた。(幕間)

ジョーの独白。4年前に母親が病気になって、息子の姿を見ても誰だか分からなくなって以来、父と兄が母代わりに料理を作ってくれるようになった。日曜の晩、夕食後、デイミアンから電話があり、「シャドウズ」というディスコに行かないか、という誘い。その近くには「血のバケツ」と異名を取る暴力バーがあり、「シャドウズ」にも恐ろしい用心棒がいて、18歳未満は入場禁止だから、と暗に断るが、16歳前後なら身分証明書の提示は求めない、それよりディスコの店内の酒は割高だから、先に酒屋で缶ビールを買ってこらあ、とデイミアン。(変人が通学すると嘯く)クリスチャン・ブラザーズ校前での待ち合わせを約束し、兄フランクの小鳥模様の黒シャツを拝借し、シャワーと髭そりを済ませ、父親には別の友人に会うと嘘をついて外出。例によって30分ほど遅れてデイミアンが缶ビールの入った鞆を持って到着。出がけに母親と一緒にワインを飲んできたため、もう出来上がっている。あまり飲みつけないジョーも2本飲むといい気分になり、よろよろと自転車で出発。ディスコ前は、大根脚にミニスカの女の子や男どもの長蛇の列で、こわもての用心棒が睨みをきかせ、入場したくなかったが、6ポンドの入場代と50ペンスのクローク料金を徴収されて入った。ディスコ慣れして踊るデイミアンにひきかえ、踊り相手もなくて退屈なジョーだったが、カウンターでビールを飲むと気分がよくなり、11時頃、瘦身で金髪に染めた女の子を連れたデイミアンが店を出ようと声をかける。家まで歩きで送ってほしい、と女の子が頼むので、キスしていちゃつく二人と共にジョーは夜道を歩いた。幽霊が出ると噂の屋根なし教会のそばを通る近道で、デイミアンはジョーに待てるように言い、半ば眠りかけた少女を連れて墓地へと向かった。しばらくたっても二人が戻ってこないで、ジョーも墓地へ入ってみると、デイミアンが酔った少女を乱暴に犯している現場を目撃してしまう。ジョーは自転車ですぐさま家へ取って返し、トイレで吐いた。その夜、ジョーは夢のなかで憧れのデボラと、裸足で赤いドレス姿の別の女(母)を見た。午前4時には目が覚め、ジュースを飲んだ。強姦現場を目撃して吐気を催すと同時に、性的に興奮してしまった自分に狼狽し、月曜日の学校は呆然と過ごした。デイミアンはその日学校には現れず、少女も性的に満足したのか、ちゃんと家まで見送ったのか、確かめる術はなかった。帰宅すると、まっすぐ自分の部屋に上がった。兄とレイがジョーのベッドに腰掛けていて、今まで見たこともないような大金が兄のベッドに置いてあった。

レイの独白。弟ジョーが入ってきた後、フランクは一切の事情を隠さずに打ち明けた。当初信じなかったジョーも、やがて怖じ気づいた。普段どおりに行動しろ、と助言したがフランクの興奮は収まらず、落ち着かせにドライブに誘った。奪った3千ポンド(約48万円)近い大金はベッド下のスーツケースにしまい、3人で出かけた。犯人の習性としてやはり犯行現場の近くを通らずにはおられず、パトカーが2台、馬券売り場に駐車して、付近の女たちが腕組みして噂していた。僅か5分間の犯行で誰にも目撃されていない、とフランクは繰り返し、ラジオを付けたたり消したりした。しまいには笑いも漏れるようになったが、これからどうしたらよいのか、というジョーの真っ当な質問に、なにもせずに静観することだ (see which way the cookie bounced)、最悪なのは映画『テルマとルイーザ』(Thelma and Louise, 1991)のように高飛びして逃避行に出ることだ、とレイは忠告した。店に戻ってみると、案の定、なにごととも起きておらず、客たちが伝える襲撃情報も、ギャング一味が車で逃走したとか、ダイナマイトで脅迫したとか、天井に残る銃弾の指紋を警察が検出中だとか、デマばかり。フランクは真面目くさった顔でその話を聞いていたから大丈夫だろう。その夜、カーメルと一緒に一夜を過ごしたレイは、翌朝レイガン教授からの留守録伝言を聞く。学科会議の顛末を詫び、討論割愛は講師の要請だからやむを得なかったのだ、という趣旨。折り返し、教授に電話し、心配ご無用と伝える。大学に出かけると、研究室のドア下に、例の女子学生(3年生)からのメモ。昨夜のうちに会いたい、という内容だが、すでに後の祭り。彼女はずっと欠席続きで、実をいうと、あまり

好きではない。ケーニヒスベルク教授の論文集を書架から取り出す。教授の理論によれば、言語は、動植物と同様に有機体であり、発生し、健やかに成長し、子孫のごとき他の小言語を生み出しては、死んでいく。いまやわれわれの言語は瀕死である。言語が病んでいるせいで、誠実さが損なわれ、政治家は道徳ではなく戦略的発言で選出され、一般大衆は読書を嫌い、アクション映画が詩に取ってかわっている有様だ、と主張する。この、アリストテレス的でもあるし、ダーウィン主義、マルクス主義、共産社会主義でもある、分類困難な学説のお陰で、彼は講演旅行して儲けているのだから、よほど狡智か、幸運な学者に違いない。やがて、レイガン教授が来訪し、最後の講演後に限り、短い質疑応答の時間を設けてもよい、と講師秘書から連絡があった旨を告げる。高名な哲学者をやりこめれば、哲学界で一旗あげることができる、とレイは期待する。いよいよそのケーニヒスベルク教授が大学に到着し、哲学科ばかりか文学、言語学、歴史の近接学科も関心を寄せ、学内は興奮の渦に包まれる。最初の講義は、全学生が聴講できるように夕方に設定され、大教室でも収容できぬほどの聴衆がつめかけ、急遽、隣教室に大型スクリーンを設置して有線放送でモニター放映するほど。レイは、みんなが教授を絶賛する姿に嫉妬する気持ちもあり、また最初の2回は質疑応答がないため、聴講せず、無料のワインとサンドウィッチが振る舞われる歓迎会には出かけて、泥酔した。一方、強奪事件の方は特に人々の話題にもならなくなったが、フランクの緊張は募っていた。そこで、金曜午前に予定されているケーニヒスベルク教授の3回目の講演のあと、また3人でドライブしよう、とレイは提案した。木曜の夜、歓迎会で酔っ払っていると、例の女子学生の姿が目にとまったが、知らん振りをしている。レイは、彼女の豊かな胸の誘惑に負けて、彼女を含む学生たちと学館バーに赴き、徐々に助平心を逞しくしていく。解散後、彼女を車に乗せて家まで送ろうとすると、彼女の手がズボンにかかり、あろうことか、飢えた赤ん坊のようにしゃぶりついてくる。自宅に着くと、すでに果てたレイを自室に誘い、彼女は膝丈まであるブーツを脱ごうとはしない。レイがそのまま下着を脱がせようとした瞬間、ドアが開いて、長髪の少年(おそらく弟)が入ってきて、レイにとびかかってきた。ズボンを上げようとしていたレイは少年に押し飛ばされて、階段をまっさかさまに転げ落ち、あわてて車に逃げ込んで、鍵を掛けた。少年は車の屋根を叩いたので、時速80キロでバックし、道路を横滑りさせてギアをローに入れた。少年は車の前に落ち、レイはアクセルを踏んだ。殺したかも知れないが、引き返すことはしなかった。帰宅後、入浴中に眠り込み、アリストテレス談義をしていた女性がやおらドレスを持ち上げると男根が生えていた、という妙ちくりんな夢を見て目が覚めた。午前2時で風呂の湯はすっかり冷めており、震えながらベッドで眠りに就いた。翌朝10時の目覚ましで起きたものの、酒と湯冷めで体調は最低最悪。それでも11時からの最終講演にはなんとか間に合った。登壇したケーニヒスベルク教授は身長150センチの丸禿げで、コメディアンのスパイク・ミリガン(Spike Milligan, 1918-)がヒトラーの物真似をやっているような不明瞭な発音だった。一心に聞き入る聴衆をよそに、レイは頭痛と吐気と下痢に四苦八苦、目を閉じて冷汗をだらだら流しながら必死に耐えた。やがて講演は終了し、万雷の拍手のあと、司会役のレイガン教授が質疑応答の筆頭にレイモンド・サリヴァン博士、すなわちレイを指名した。中央の席に座っていたレイは逃げ出すこともできず、ついにこらえ切れなくなり、オレンジ色の嘔吐が尾を引いてほとぼりした。嘔吐は前方3メートルの人々の頭上に降り注ぎ、啞然と凍りつく聴衆からは声一つ漏れなかった。レイは吐き終えてすっかり気分がよくなり、咳払いして曰く、「先生の卓越された長いご経歴のなかで、このような場面をご覧になったことがおありでしょうか。」老教授は黙っていたが、最後にゆっくりと首を振った。丁寧な謝辞を述べ、嘔吐臭の立ち込めるなか、レイは退場した。

「その話は初耳だ」とフランクが舞台上のレイに語りかけ、「とっておきだからね」とレイが応じたのち、フランクの独白。事件後にまず彼がやったことは、銃を山中に埋めること。現金はいざという

ときに掘り出しにくいし、銀行預金すると無論怪しまれるので、ずっとベッドの下に置いてあった。サイモンと甥は水曜に店に来たが、以前のように威張ってはいなかった。もしレイが偶然来なかったらつかまっていたに違いないから、幸運といえるが、盗んだ金はおおびらに父親の負債返済にも使えず、役に立たない。フランクは、鉛管工の人妻とかつて恋仲になった話をしようとしたが、弟ジョーは眠っていた。とにかく、数日、転地休養が必要だと判断したフランクは、ジョーをダシに使って、レイたちと週末ドライブに出かけることに決めた。現金は石と一緒にビニール袋に入れて輪ゴムで縛って屋根裏のタンクに隠した。出発の金曜の朝、父親が小遣いにとフランクに50ポンド、ジョーにも20ポンドを与え、二人とも後ろめたい気になる。二日酔いのレイが現れ、目的地未定だったが、ジョーの提案でコークに向けて出発。コークのホテルにフランクとジョー、レイが泊まり、夕食後街へ繰り出してパブで飲み、ホテルのディスコでは同い年くらいの少女とジョーが仲良くなった。だが、日曜の夕方戻ると、店の前にパトカーが1台とまっていた。

ジョーの独白。警官の姿を見たとき、逃走しようとみんな思ったが手遅れだった。フランクは顔面蒼白で震えていた。しかし、刑事が話があったのは僕だった。セアラ・コムスキー(Sarah Comisky)という少女を知っているか、と尋問され、知らないと答えると、前の日曜に「シャドウズ」に行ったか、と訊かれ、父と僕とだけに人払いした場所で、セアラ強姦で起訴されている、と聞かされ、仰天した。少女は酩酊していて加害者を覚えていないから、共犯なのか、どちらか一方の単独犯なのか、と刑事。父親と署まで同行し、事情聴取に子細に応じ、血液検査も受けて、帰宅。親友デイミアンの裏切りを嘆くジョーに、人間誰しも我が身がかわいいものさ、と父親。その夜遅くまで、みんなで酒を飲んで話をした。ジョーは亡き母親のことを思った。口がきけなくなる以前の、母の思い出。夏の浜辺で石を水平に投げて水きりをするコツを父が母に教えているが、母には出来なくて、自分でもおかしくて笑っている、赤いドレス姿の母。安心感がわいてきた。その週は登校せず、火曜日に警官が来て、血液検査の判定はシロと告げ、デイミアンが起訴された。うちでお祝いをした。フランクは、例の金を僕の大学進学資金に回してもいいと言い、数週間後にアメリカのシカゴに渡った。働いて得た金なのかどうか不明だが、借金返済に使うようにと、父親宛てに送金してきた。レイは誰も読まない研究書を上梓し、自己満足こそ肝心、と言う。結局、すべての事態は好転した。この話はべてんだろうか、僕にはわからない。ただ、いまでも、あの娘の姿が目には浮かぶ。

強奪事件は迷宮入りし、実行犯のフランクも、事情を知っている弟ジョーも逮捕されないで話が終わっている点が、気がかりだろう。ちょうど、フランク・マコート(Frank McCourt, 1930-)の『アンジェラの灰』(*Angela's Ashes*, 1996)のなかでも、発作で急死した金貸し老婆フィニューキンの金を主人公フランシーが盗んでアメリカ渡航費に当てたのと同じ割り切れなさ、後味の苦さが残るだろう。同様なことは、教え子の女子学生と2度に渡って性的関係をもった大学講師レイの不品行にも言える。深夜の墓地で青カンのデイミアンが告発されるのならば、教育者の立場にあるレイの破廉恥な行為も厳しく処罰されねばならないだろうし、性差別者でもあることも窺わせる様々な彼の台詞もしかりである。ただ、弁護できる点をレイに探すならば、直情な性格であろう。女子学生との事件に関しても、マメットが『オレアナ』で描いたような隠微・陰湿な側面はなく、割合にあっけらかんとしている。つ

まり、レイは奸計を弄さない。浴びるほどに酒に溺れ、動物的に発情しているにすぎない。有名哲学教授を論駁して名声を得ようと、彼が打算で動いたときは、みずからの飲酒癖で墓穴を掘っている。マクファーソンはUCDの哲学科で、「倫理学」「道德哲学」担当のチューターとして2年間勤務したこともあり、このときの体験がレイの造型に生かされていると思われる。この芝居のクライマックスの一つである衆人環視のなかでの大嘔吐場面は、誰しもスティーン・キング (Stephen King, 1947-) の中編『死体』(The Body) を映画化した『スタンド・バイ・ミー』(Stand by Me, 1986) の復讐場面を思い浮かべるだろう。デブであると愚弄された少年が大喰い選手権に出場して無理やりに食べ物を詰め込み、やがて愚弄した人々に向けて、怒涛のごとく嘔吐を吐き散らす名場面である。思えば、これも子どもたちの語るストーリー・テリングの一種として希代の名手スティーン・キングが考案した話であり、ゲロ吐きはいまや定番ネタなのかも知れない。

④ 『聖ニコラス』(St. Nicholas) 2部

ブッシュ劇場座付作家委嘱作として書かれ、名優ブライアン・コックス (Brian Cox, 1946-) が多忙なスケジュールを割いて出演した。コックスはルーシル・ローテル (Lucille Lortell) 賞をその名演で受賞した。演劇批評家を虚仮にするこの芝居が、果たして演劇批評家たちにどう受け入れられるか、心配だったが、好評を博した。

50代後半の演劇批評家の男が、なにもない舞台上で演じる一人芝居。二部構成。

第1部。子どもどころ、吸血鬼やお化けがいるのではと思って暗闇が怖かった。しかし本当は、空想や迷信よりも実在するものの方がもっと異常で恐ろしい。当時の私は太って太鼓腹で、酒のせいで赤い口髭の、権勢ある劇評家だった。言葉を紡ぐ術を心得ており、愛と敬意を望んでいた。人々は選り好みの激しい私がどんなものなら気に入るのか、怯えていた。評論ばかりでなく、創作に励んだこともあったが、作品にはならなかった。初演に駆けつけて只酒をふるまわれ、ろくでもない芝居を見ないように大衆に劇評で知らせる、酔払いの三文文士にすぎず、馬齢を重ねながらも誇れる業績はなく、演出家と口論になったり、終演前に席を立ち、テレビに出演したりした。日に1時間だけ精を出す評論も、昔の焼直しですんだ。終演を待たずして劇評はたいてい完成していた。こんなやつつけ仕事でも、新聞に載る長者番付の上位5位には顔を出し、編集者からはちやほやされた。女房も太った酔払いで、私より筆の立つ聡明な大学生の娘とミュージシャン志望のどら息子がいた。記事欄を言葉で埋め尽くすのは責任感を伴う大変な作業だが、刺激的な特ダネを得るには町中にいなければならず、同業者に対しては仲間意識と同時に憎しみも抱く。これが私がいたジャーナリズムの世界であり、強情ぱりが権威としてまかり通っていた。他の批評家連中からは嫌われ、私のほうでも、<物を見る角度>とやらを、まるで行列見^{パレード}たさに飛び跳ねる餓鬼みたいにひたすら追い求めるだけの、かれらの気の抜けた文章 (wishy-washiness) が気に入らなかった。けっして同業者とは同席しないという高飛車な姿勢をみせつけることで、逆に好感を持たれることを狙っていた。だが、ある前途有望な女優との出会いが私をどたどたに巻き込むことになった。それはアビー劇場の『サロメ』でこの王女

役を演じたヘレン (Helen) という女性だった。この夜も、上演中にプログラムの裏表紙にメモしておいた評を自動車から電話で入稿を終えていた。いくら酷評を寄せても報酬を得られたが、そのときは賛否両論併記の寛大な評を書いた。パブに入ってビール2杯とウィスキーを飲んで寛いでいると、アイルランド演劇のシンポジウムで数年前に知り合った演出家ハミルトン (Peter Hamilton) という嫌な奴が声をかけてきた。明日の朝刊に劇評を書く予定の私が呑気にパブにいることに驚いた様子だったが、すでに入稿済みで朝刊早番に出ている、と告げると、一刻も内容を早く知りたがった。近年にない大傑作だと、誇大な感想を私が述べると、彼は喜んでパブにいた役者たちに知らせに走った。おごりの酒がふるまわれ、いつしか自分でも本当に賛辞を寄稿したつもりになり、この芝居は「私の人生を変えたよ」と誰彼となく、涙交じりに賞賛して言いふらした。もう1軒、梯子しようと誘われたが、疲れていたのを断った。朝刊を読んで、私が大嘘つき野郎だと悟られるのも時間の問題だった。ところが、先の女優ヘレンが同じ方向に帰るから、と同乗を頼んできた。美しい脚にこっそり目をやり、黙ったままゆっくりと運転しつつ、本当のことを打ち明けようと思いつつ、果たせずに別れた。別れ際に彼女は頬にキスしてくれた。自宅書斎で、自殺を考えた。自殺すれば誠実さが分かってもらえるのでは、と。だがそんな勇気もなくソファに寝転がったまま朝を迎えた。結局、その公演は他紙にもよい劇評がまったく得られず、当初予定されたロンドン公演も半分の2週間に短縮された。当地での公演終了後、私はロンドンに向けて出発した。未明に恋人と帰宅した息子はまだ寝ていたし、娘はとっくに外出していた。掌よりも小さな背中のかわいい赤ん坊だったころの娘を思い出して懐かしむ。妻にも挨拶せず、空路ロンドンへ出発。書店やパブ、観光気分でのんびり過ごし、15年来着古した上着を新調して、もてる男になろうと努めた。劇場前のパブで役者たちの到着を待っていると、ヘレンが演出のハミルトンとタクシーでやってきて腕を組んでいた。役得を利用してヘレンと情事をしているのかと、私は内心穏やかでない。やがてヘレンたち役者がパブに来たので、ツイードの帽子を買って目深にかぶり、こっそりと店の隅から様子を窺った。一行が夜10時に店を出て、地下鉄、列車と乗り継いで郊外のブルムリー区 (Bromley) のテラス・ハウスに入るまでずっと尾行した。1時間ほど外で酒を飲んでつぶした後、その家を深夜にも関わらず訪問した。別の女優リースン (Cliona Leeson) とハミルトンが戸口に現れ、私の姿を見て驚いている間に、先日の劇評は編集者が勝手に私の原稿を改竄したもので、ご迷惑をおかけした責任を取って私はその新聞社に辞表を出してきた、と作り話をする。通された客間でも、ハミルトン演出の妙をわざと大声で絶賛し、聞きつけた階上の女優たちが降りてきた。ヘレンは疲れて無表情だった。年配の女優キルミーディ (Sheila Kilmeedy) の夫はテレビ俳優で、かつて私は状況喜劇 (sitcom) のテレビドラマの名場面 (cameo) で彼の演技を酷評したことがあった。それを恨みに思っただけか、私の釈明話など信じられない、と彼女は言って寝室に下がり、ヘレンたちもそれに倣った。招かれざる客として、ソファで私は一夜を明かすこととなったが、朝6時前にウィスキーをズボンにこぼして目が覚め、吐き気を催して嘔吐し、下痢 (the runs) もした。ところがトイレの隅にポルノ雑誌が押し込んであるのを発見。読者の愛妻投稿写真で、露に開脚している淫らなもの。この写真に劣情を刺激された私は寝室のある二階に忍び寄る。ハミルトンとリースンが寝ている一室、キルミーディの部屋、そして目指すヘレンの部屋のドアを開けて侵入。長年、書斎で読んできたエリザベス朝詩人たちの詩は、すべて前戯や性行為 (having it off) の詩だったことを思い出す。しかしヘレンのベッドまで来ながら、理性が押しとどめて、私は静かに部屋を離れた。早朝通勤の車で込み始めた道路を西へ歩きだし、チャーサー巡礼の地、マールロウ生没の地ケントを目指して、休みながらも午前中歩きづめで水晶宮公園 (Crystal Palace Park) に辿り着き、思えば馬鹿な真似をしたものだと自嘲しつつ、寝転んでまどろんだ。目覚めると、すでに黄昏時。暗くなる前に公園を出ねば、と思ったとき、大型犬のような暗い影が見えた。それは30歳

くらしい男で、笑みを浮かべて近づいてきて、旧知の仲のような気のおけない人柄の人物だった。ウィリアムと名乗り、握手を求めた彼の手は吸血鬼のように冷たくはなかった。(幕間)

第2部。彼らには、人の意思を思いのままに操り、人間の動物的本性に訴えかける真の力がある。ウィリアムはタクシーを呼び、一緒に乗り込んだ。いつしか辿り着いたのは、郊外の古びた大邸宅で、真紅の絨毯に装飾手摺のある屋敷で高級スコッチ(Glenfiddich)をご馳走になった。猫の目のように輝く碧い瞳を逸らしながら、ウィリアムは、この屋敷には自分のほかに5人の女性が暮らしており、毎晩パーティを催しているから若い客人を連れてきてほしい、楽しむには夜が一番だ、などと語る。寝室として案内されたのは、階上の屋根裏部屋で、寝台と机のほかに聖書も置いてあった。ウィリアム曰く、自分がニンニク嫌いなのは単に口臭がするからで、東欧には吸血鬼を追い払うために窓枠に米粒をまく伝統がある、米粒を勘定している間に朝が来るからだ。その口振りからは、米粒を数えるのは深い探求心のなせる高貴な営みだと、彼が思っていることが窺えた。やがて握手して彼は去り、私は家族のことを思ったが、昔の家族のことばかりが去来した。サンタの話をして、赤の他人の表情が晴れるわけではなく、特定の時期に特定の人だけを喜ばすことができるだけである。われわれは、吸血鬼に噛みつかれると吸血鬼になる、という因襲的な考えを持つと同時に、吸血鬼の噛みつきは、死を寄せつけぬ超自然的な<魔術>だとも思いたがる。しかし、実際には自然も<魔術>なのであり、いくら自然を科学的に研究し、法則を発見しようとも、そもそもその法則自体がなぜ存在するのかは解明できない。例えば、地球が太陽の回りを公転するのは重力のせいとはわかっても、なぜ重力が存在するのかはわからない…。そんな思案を巡らすうちに机に向かって眠ってしまい、朝になった。夜中に女性の笑い声を聞いたような気がする。昼間の屋敷は不気味でもなく、冷蔵庫にはご馳走が満載で、裏庭を散歩したり、読書や酒で快適な居候生活気分。夕方、急に冷え込むと、ストレートの髪で、滑らかで遅い体つきの黒人女性が、衣服が詰まった鞆を渡して立ち去った。続いてウィリアムが現れ、外出の時刻だと告げた。屋敷の外にきたタクシーに私は乗り込み、観光客とダブ屋だらけのソーホーはレスター・スクエア(Leicester Square)で、パーティに来てくれそうな若いカモを物色した。パブで気がついたことだが、私には人を惹きつける魅力が生じていて、雑誌社勤務のドミニク(Dominique)という可愛い金髪女性と知り合い、そのコンパ仲間のオックスフォード大学の友人たちの心も虜にして、ウィリアムの館まで誘い込むのに成功した。中庭で若者たちは抱き合って踊り、いつのまにか例の屋敷の美女たちの姿も見え、月明りのもと、若者たちは芝生に横たわり始めた。私は就寝し、朝10時に起床。台所の床に寝ていたドミニクにぶつかり、頭痛のする彼女に鎮痛薬を与え、屋敷のあちこちで寝ている若者たちを起こして回り、みんなを見送った。誰も危害は受けておらず、それ以降毎晩、同じようにバーで若者を見つけては館に呼び込み、翌朝送り出すという仕事を続けた。こうしてダブリンに戻るのを先送りして、読書や下手な執筆で過ごした。ウィリアムは吸血鬼で、人間でないことは先刻承知していたものの、どこがどう違うのかは分からなかった。あるときウィリアムは私に、著述に励むように勧め、<座るための>椅子や<切るための>ナイフと違い、芸術はそれ自身のために存在するのであり、著作行為自体が善なのだ、と語った。彼の御託にうんざりした私は、あなたのように長寿と智慧を持てればさぞ素晴らしいでしょうね、と言うと、彼は次のような物語を聞かせた。――「ずっと昔のこと、愛する妻といつでも一緒にいられる幸せに恵まれた樵がいた。子どもができないことだけが心残りだったが、運命と諦めた。ある日樵が森で働いていると、近いような遠いような叫び声が聞こえた。それもそのはず、その声は森の泉から発しており、覗いてみると、ある老人が溺れないように必死にバケツにしがみついていた。樵は老人を泉から引上げ、寝かせたが、すでに手遅れ。老人はいまわの際に感謝の言葉をもらし、自分の手提げ鞆のなかを見るように言った。鞆には時計作り工具と、見たこともないほど美しい新品の時計があった。老人

は、その時計を差し上げたい、時間以外のことも教えてくれる、と言いつつ息を引き取った。そののち、だいぶ経ってから、樵はようやく時計の秘密を知った。ある冬の黄昏時、時計が止まっていることに気づいた樵は、ネジを巻いたが動かない。そこで逆にネジを回すと、不思議なことに太陽が高く上り明るくなった。元のように回すと太陽は沈んだ。つまり時間旅行ができる時計なのだ。樵はこの秘密を妻にも教えなかった。樵は、〈現在・このとき〉に満足していたので、この不思議な機能を使うことはなかった。しかし、やがて妻が死に、彼は当然ながら、折にふれて少し昔に戻っては妻を抱いた。次第に過去への旅はいつそう昔に溯り、まだ樵が妻に出会う前の、妻の子ども時代になり、老いた樵は幼少の妻が戯れるさまを眺めた。このことはいつそう彼の心をせつなくさせ、自分が死んで天国で妻と再会する日までは、一人でしっかりと生きようと決心した。ところが、いつのまにか時計が本当に壊れてしまい、ネジも動かない。樵は誰ひとり知る人のない過去の世界に取り残されてしまったのだ。彼はそこで、こどもの妻を誘拐して森へ逃げ込んだが、幼女は泣きじゃくるばかり。やがて村人に樵はつかまり、鞭打たれて、捨てられたのだった。」——この〈もとへ戻れない物語〉の教訓や意味は何なのか、とウィリアムに尋ねたが、本人も知らなかった。つまり、われわれ人間はこの物語を聞いて〈内省する〉が、吸血鬼たちはしないのだ。そして、ウィリアムは、自分の行為を後悔できぬことを後悔しており、彼は〈良心〉を求めていたのだ。私はかつて、悪いと〈自覚〉するがゆえに悪事を働いてきた。しかし、ウィリアムの行動原理には理性の入りこむ余地はなく、彼は動物的本性に従って行動し、自然には抗えない。試しに米粒を床にぶちまけると、ウィリアムは他の魔女たちとあくせく拾って数え始めた。そこでこのとき、今夜限りで彼の使いは止めしようとして私は腹を括った。ソーホーの深夜営業のバーでいつものように、若者に声をかけて溶け込んでいた。そのときサンダルの裸足で気づいたのだが、女優ヘレンに再会を果たした。ダブリンから突如失踪した人間が、ロンドンで若者を楽しませているのだから、じろじろと好奇の目で見つめられても仕方ない、と涙ぐむ私にキスして、「みんなずうっと心配していたわ」とヘレン。同伴の役者仲間を館に連れこむのはよしとしても、ヘレンだけは引き離して魔の手から守らねば。ヘレンと過ごす二度目の車中、彼女に凭れて「今夜は私のそばにいななくちゃだめだ」と忠告。だが、館では、吸血鬼たちがすでに中庭に総出で待ち受け、米粒数えで恥をかかされたウィリアムは無言で私を見つめていた。うとうとするヘレンを館の中に率いるうちに、見失い、吸血鬼の女に抱かれて空中浮遊のさなか、女に腕を噛まれて激痛と悪寒が走った。ドスンと床に落下し、女は私の上に乗って眠っていた。ヘレンを探しに中庭に戻ると、時すでに夜明け間近。ウィリアムの声が漏れる屋根裏部屋にそっと上ると、半裸のヘレンが私のベッドに寝ていて、すでに噛まれてしまった後らしい。美しいヘレンと、実在しない黒い塊のウィリアムを見比べ、自分がヘレンと同じ人間に近いことを誇りに思って、ウィリアムを愚弄すると、彼の目はギラギラと赤く燃えた。ヘレンは私の指示にゆっくりと従って立ち上がった。ここを離れると幸せにはなれないぞと、脅すウィリアムに、「幸せだとしてもそんなに楽しいことじゃない」とやり返して、ヘレンを連れて階下へ降り、役者仲間と一緒にソファに寝かせ、キスをした。〈良心〉ある人間の真似をしてか、ウィリアムは追ってはこなかった。夏の終りで朝の気には冷気があった。ダブリンへ戻れば、「復帰」をテーマに作品を書いたりして、みんなの同情を買えるだろう。健康と不屈の精神と、なによりも私は〈物語〉を得たのだから。

この話は現実なのか、夢なのかと訊かれるならば、夢でないものなどありはしない、と答えよう。将来計画も空想も恐怖も、嫌なことに突如気づくこと (rude awakenings) も、すべては夢なのだ。誰かにぞっこん一目惚れすることも同じように夢物語だし、傷の癒えるように、ゆっくり育んだ愛の場合でも、相手が自分ほど思ってくれないとあって、愛と同じくらい、むかつきはじめてる人はいませんか？ どちらにも当て嵌まらず、まだ破局を迎えていないあなたは、希望そのものですから、あり

がたい存在です。そういう人は一体、どこにいるのでしょうか？

「劇評家」の実態をリアルかつ皮肉に描いた演劇内幕ものの第1部と、吸血鬼伝説に取材した空想的な第2部とは、相当に異質の世界になっている。登場人物に演劇批評家がとられる作品といえば、古くはシェリダン (Richard Brinsley Sheridan, 1751-1816) の『批評家、あるいはリハーサルの悲劇』 (*The Critic, or Tragedy Rehearsed*, 1779) が有名であろう。当時の、悪意に満ちた文学批評への風刺は2人の愚劣な批評家ダングル (Dangle) とスニア (Sneer) に体现されている。シェリダン作品で特徴的な登場人物への寓喩的命名は、この『批評家』でも、「つきまとい／ぶらさがり」を意味する‘dangle’と「冷笑・せせら笑い」の‘sneer’から明らかである。一方の吸血鬼伝説は、ブラム・ストウカー (Bram Abraham Stoker, 1847-1912) の『ドラキュラ』 (*Dracula*, 1897) をはじめ、ニール・ジョーダン (Neil Jordan, 1950-) 監督の映画『狼の血族』 (*The Company of Wolves*, 1984) や『インタビュー・ウィズ・ヴァンパイア』 (*Interview with the Vampire: The Vampire Chronicles*, 1994) などでも扱われる、アイルランドに比較的馴染みの深い主題である。ジョーダン自身の著作にも、『獣の夢』 (*The Dream of a Beast*, 1983) という、獣への変身譚を扱った幻想的な作品がある。(マクファーソンは、2001年春からニール・ジョーダン映画の脚本の執筆を開始するという。)

標題の「聖ニコラス」は、いわゆる「サンタ・クロス」に当たる聖者であるが、内容との関連では、第1部で「サンタの話を持ち出して喜ばせられるのは、(クリスマスという) 特定の時期、(家族という) 特定の人間だけ」という台詞程度である。子どもたちに夢を運ぶ守護聖人という側面を考え合わせると、良い上演だったと嘘をついて一時的にせよ、役者たちにく夢>を与えたり、巧みな話術と人柄で若者の心をつかんで、吸血鬼の屋敷のパーティで楽しませて一夜のく夢>を見させた私の役割は、サンタの役回りに似ていなくもない。私が、腹の出たデブの50男で、赤い口髭をはやしているのも少しサンタの風貌があるし、自分の娘とおなじ年頃の、彼からすればく子ども>のような女優に恋をしながらも一線は越えず、外敵から彼女を必死に守ろうとしたのも、子どもの守護聖人に相応しい行動であろう。

- ⑤ 『堰』 (*The Weir*)^{ウィア} 1幕 イヴニング・スタンダード (Evening Standard) 賞, 批評家サークル (Critics' Circle) 賞, ジョージ・ディヴァイン (George Devine) 賞受賞

恋人リオナ (Rionach) が研究職についた英国中部のレスターで執筆され、ダブリンに戻って手書き原稿を妹マーガレットにバイトでタイプさせ、原稿を読んだ妹や友人ヒーリーも激賞し、委嘱元のロイヤル・コート劇場もすぐ公演準備に着手してくれた。演出のリックソン (Ian Rickson) と舞台デザイン担当女性を、作品の舞台設定となったシャノン川のジェイムズタウン (Jamestown) までマクファーソンみずから案内し、付近のパブや祖父のジャッ

ク、詩人イエイツの墓などを回り、作品の世界さながらに、余所者（しかも唯一の女性客）の来訪に身構えるパブの地元客や、気の触れたアメリカ人妻と懇ろになり、夫人の犬の世話をしながら、アメリカに帰国したまま帰らぬ彼女を待ち続けているという、酔客の風変わりな身の上話を聞かされた。プロットの予備知識のない観客が詰めかけた試演（60席のロイヤル・コート劇場）では、ヴァレリが死んだ娘の話をするあたりで、連日のように失神者が出て、運び出されたという。『聖ニコラス』を演じたブライアン・コックスが初日に来て、最悪の芝居だ、と酷評され、マクファーソンは啞然となったが、恋人リオナ入知恵の悪い冗談にすぎず、3週間の初演を好評裡に終えたあと、1999年4月にブロードウェイで再演された。

『堰』は現時点で、マクファーソンの代表作であり、日本でも2000年11月—12月にかけて新宿・信濃町の文学座アトリエにおいて、その50周年記念事業の一環として鶴山仁・演出で上演された。152脚のパイプ椅子を並べて作った客席からごく間近の小空間の舞台上で合計15公演がなされ、のべ2千人を越える観客が詰めかけた計算になる。すぐれた翻訳の上演台本も入手でき、他の作品のように詳細な梗概を書き連ねる必要はこの作品に関しては薄いと思われるので、主題や問題点・疑問点、さらに筆者が観劇した2回の公演（12月5日昼・夜）の感想や印象を記すことで、今回もまた台本や舞台写真のご提供を賜った文学座の方々に報いたいと思う。

(a) モノローグ技法の基本的踏襲

これまで①～④で見てきたように、独白主体の一人芝居を書き続けてきたマクファーソンにとって、5人（男4，女1）の登場人物を舞台に配した点では、『堰』はこれまでにない画期的な試みだったことは確かである。しかしながら、5つの長い独白から成り立っているこの作品の骨子は、これまでの独白技法を基本的には踏襲しているといってもよいだろう。5つの独白は、4つの怪談・怪奇譚と、終盤にジャックが若き日を回想する1つの訓話である。5人各自が1独白ずつ、というのではなく、ブレンダンに独白がない代わりにジャックが2つの独白を担当する。怪奇譚はジャック、フィンバー、ジミー、ヴァレリの順に語られるが、最初のジャックの話は、他の登場人物もよく知っている近所の祖母さんの語る有名な物語であり、話者本人が実体験で見聞したのは、フィンバー、ジミー、ヴァレリであり、ジャックとブレンダンには語るべき魔界体験はない。この二人はその意味では現実にはしっかりと踏みとどまった人間である、と見なすことができよう。

(b) 標題の比喩的な意味

次に、標題について。標題の「堰」は、舞台の設定地であるスライゴウ／リートリム州西

部に「発電用の水量を調整するために」、1951年に電力供給公社 (Electricity Supply Board) によって建設された地元の堰 (ダム) を意味し、パブの壁にその当時の堰の写真が掲げられている。しかし、堰はアイルランドの近代化や開発の象徴として用いられているのでは決してなく、5人の登場人物がお喋りや物語を語ることによって、喜怒哀楽の感情という名の横溢する水流をみずから抑制・調整しつつ放流・発散していく様子を比喩的に表現したものである⁶⁾。敷衍すれば、一条の滝のように激しくダムから噴出される放水は、一定水量を持続的に淡々と川下へ流していく。水底に動物の死骸や腐敗した樹木も沈殿し、満々と深い水を湛えた巨大な貯水槽が背後にあるがゆえに、僅かばかりの隙間から迸りでるその水流は、ひとしお激しさを増している。さながら、人間の魂・心という巨大ダムに溜め込まれた感情が、小さな口唇の隙間からとめどなく噴出されるように。恣意的な邪推と著者からは叱られるだろうが、‘weir’ (『堰』) という、Old Englishにも溯る、古風で見慣れない単語が敢えて標題に使用された副次的な理由は、音の連想が関係している気がする。怪談が話の主題となるこの作品は、‘weird’ (「不思議な」「この世のものとも思われぬ」もの) であるし、4人の村の男たちの友情や連帯感、彼らがヴァレリを歓迎する姿勢は‘we’re’ (「我らあり」) にも通じる。裏返していえば、‘weir’の同義語である即物的な‘dam’ (「ダム」) を使うと、‘damn’ (「呪い」) の悪い響きが残ることも‘weir’が選ばれた消極的な理由かもしれない。

(c) 文学座アトリエ公演観劇雑感 (文中、敬称略)

微かにポプリの匂い漂うような枯れ葉を周縁に散り敷き、進行に不要なテレビ以外はテキスト指定に忠実に従い、アイルランドの田舎パブを写実的に再現しようと工夫を凝らしたセット (美術・石井強司) に、全体に仄暗い幻想的な照明 (金 英秀) が施され、落ち着いた舞台空間が出来上がっていた。ストーブの温もりも音と光だけでうまく表現されていた。

抑えた知的な演技が要求される難しい役柄のヴァレリを、端整な容貌の山崎美貴は無難にこなしていた。ただ、筆者がテキストからイメージしていたヴァレリは、もう少しエキセントリックさを秘めた女性で、登場の際には、まだ愛娘^{まな}の死から立ち直れぬ、憂愁を帯びた暗い表情を見せ、(山崎美貴のように) にこやかに微笑むことはしないだろう、という思いが脳裏をよぎった。衣装のロング・スカートは清楚な女らしさ・母親らしさを表していたが、テキストの指示通り、ジーンズの方がもっとヴァレリの活動的な一面や田舎生活にける意気込みが引き出せたのでは、と思う (衣装・板原寿子)。

ジム役の粟野史洋の、茫洋とした野暮ったい雰囲気はよかったが、やや声量の足りぬ長い独白には誘い込むような躍動するリズムの魅力が感じられない。変質者の亡霊の話で、「そしてたらその男ぱつと振り返って」の台詞の「ぱつと」を唐突に思い切り大声で叫んで観客の度肝をぬいたり、「車の中でラジオを聞いていた」を合図^{キュー}にブレンダンが実際にラジオをつける

など、原作テキストに特に指示のない演出が施されたのは、英米の舞台でなされた演出の模倣であろうか、あるいは、彼の台詞回しの単調さにめりはりをつけることを意図してのことだろうか。音響効果（望月勲）は、開演前に流す民族音楽や劇中の荒涼たる風の音を低く抑さえた音量で控え目に挿入していただけに、ラジオをつけたことで、たとえ小さい効果音でも、アイルランド音楽の軽快な旋律が客席に流れ、これからせつかく佳境に向かおうとするジムの話への観客の注意をそらし、また物理的にも台詞を聞き取りにくくさせて逆効果だったように思う。（物語ではラジオを聞いていたのは墓掘作業の休憩時だけであり、以降の台詞とラジオはもはや無縁になるから、ほんの一時的な演出にこだわっても、ほとんど意味がないだろう。）

ブレンダン役の中村彰男は、観客全般に与える印象は好ましいように肌で感じられたが、一部の台詞が必要以上に語気が荒く、体全体の表現と声との不一致の印象が筆者には気になった。苛立った台詞は秀逸でも、決して怒気を含んで言うべきでない台詞に怒気のこもる、ぶっきらぼうな一本調子が目立ったが、話しかける相手の位置や人間関係などに応じて声の調子を変える工夫をしてほしい。

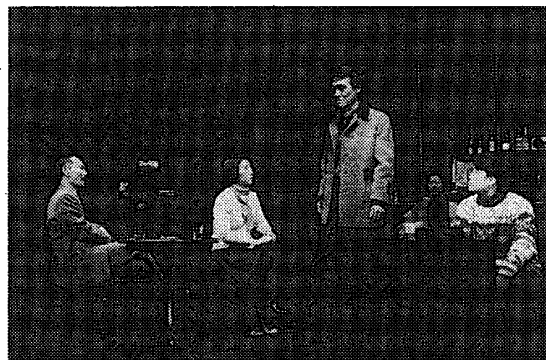
主役ジャックの小林勝也の演技は円熟していて、鋭くもあり人なつっこくもある眼光と、どすのきいた低音の、壺を押さえた台詞回しで観客の注意を申し分なく引き寄せていた。フィンバーの斎藤志郎はそれと好対照に、高音と低音を巧みに使い分け、世慣れたホテル経営者らしい喜劇的情感に溢れていた。二人とも相当量のビールやウィスキーを実際に飲んでいながら、声が少しもうわずらないのはさすがだった。少し酩酊して言い淀んだり、どもったりするくらいの酔払い演技になっても、筆者にはかえって面白いように思えたが、最後までプロに徹した素面の表情を失わず、年季を積んだ二人の老練な役者が、比較的若手の他の三人にプロ根性のなんたるかを、率先して実技指導しているかの印象があった。



写真①（左から山崎美貴，小林勝也）



写真②（左から斎藤志郎，山崎美貴）



写真③(左から栗野史洋, 小林勝也, 中村彰男) 写真④(左から, 小林, 山崎, 斎藤, 中村, 栗野)

写真①～④はすべて撮影・小山秀司(2000年11月/12月アトリエの会『ザ・ウィアー』舞台写真)

次に、翻訳の問題について3点。1つ目は、<妖精の道>あるいは<妖精>そのものが、日本語の含意ではファンタスティックで好ましいニュアンスがあり、恐ろしさが伝わらないように感じた。ここは思い切って<霊道><妖怪の道><もののけの道>ぐらいにしたほうが雰囲気は近いのではないか。堰建設後、多数の鳥の死骸が上がったことは、この<妖精>が鳥に化身していたことを意味するのだろうか。堰の設置によって河川の水量が減り、餌を失った水鳥たち=妖精たちが死に絶えたことは、開発による生態系や自然破壊を暗示し、ダム建設の両義性を表している。ダムがもたらす電気は文明の象徴であり、この人工の明るさは人々の暮らしを便利にし、無知蒙昧の闇を消し去った。だが、消された闇のなかにこそ、人間の豊かな想像力の源泉があった。(ポール・マルドゥーンの初期の詩「電気」はそのことを伝えるものだし、ダム建設などの開発事業が過去の歴史遺産を破壊することへの批判は、観光客目当ての屋内地下プール付き豪華ホテル建設のために、死刑囚政治犯たちの手でヴァイキング遺跡が発掘される悲劇的な様子を描いたブライアン・フリールの『ヴォランティアズ』(Volunteers, 1975)が先鞭をつけている。)その闇を伝えるには、日本語の<妖精>は余りにも軽やかすぎるだろう。

2つ目は、翻訳文体の問題。息の長い間接話法の原文を翻訳で直接話法に直すことは、耳で聞いて分かりやすく便利だが、ときどき話者の視点が一貫せず、気にかかる場面があった。娘の事故についてヴァレリが告げられる箇所(の)の台詞は、「そしたら一人、他の子のお母さんが近寄ってきて、事故があった、ニーヴが、プールの中で頭を打って、そのまま沈んで、今蘇生させようとしてるんだって、でもきっと大丈夫よって、そう言ってくれたの。」である。この口調では、知合いのお母さんのかけた声が、『事故があった。ニーヴが、プールの中で頭を打って、そのまま沈んで、今蘇生させようとしてる。でもきっと大丈夫よ』に聞こえるのだが、直接話法に近づけるなら、会話体としては、『事故があったのよ/あつてね、ニーヴちゃんが、プールの中で頭を打って、そのまま沈んでしまつて、いま人口呼吸してるの

よ、でもきっと大丈夫よ』くらいが自然ではないだろうか。つまり、ヴァレリが頭で整理して自分の視点から、難解な言葉（「蘇生」）も交えて客観的に伝えようとする間接話法では妥当でも、実際の台詞としてはもうすこし違った言い回しの日本語になるのでは、と思えた。同じ違和感は、ヴァレリが抑揚を殺して伝える救急隊員の台詞——「どうもやってることがうまくいってるとは思えない、まだ生きてるのかどうかもわからない」——には、他人事のような冷たいニュアンスも感じられた。「いまやってる、このやり方じゃ、どうも効かない、みたいだ。この子、死んじゃって、ないだろうな」ぐらいに、必死にリズムカルに胸を押し、蘇生活動に従事している緊迫した臨場感を伝えて欲しい。もちろんヴァレリとしては、淡々と語らざるを得ないのかも知れないが、隊員がもはや諦め気味で、手を抜きかけているようにも聞こえた。

3つ目は、＜ドイツ人の出身地＞ジョークの問題。ドイツ人キャンプ客の多いことがテキストではしばしば言及され、一時的にせよ、村に大量移民のように外国人観光客が押し寄せ、パブを占拠することを登場人物たちは苦々しく思っている。異なる人種との文化摩擦の縮図でもあるこの身近なエピソードは、移民受け入れの方が増加した⁷⁾こんにちのアイルランドでは違和感なく受け入れられるが、はるか昔、アメリカや豪州へ移民として出かけたアイルランド人の祖先たちは、きっと逆の立場で味わった状況に違いない。「あいつら（＝ドイツ人）話してるのがわかんねえんだよな」というジャックの嘆きは、同じ英語圏でも発音や語彙が特徴的なアイルランド英語、あるいはアイルランド語しか話せないよそ者の移民に対して、移民先の地元住民が、悪感情から発しがちな偏見のこもる言葉の典型だろう。老いたジムの母親の容体をしきりに案じる男たちの思いやり溢れる言葉が、この村の共同体のやさしさを感じさせるとすれば、そのやさしさは、この村という閉ざされた狭い共同体の中でだけ通用するものであり、赤の他人の＜アイルランド人＞ジャックが、イギリスのパブで手作りのサンドウィッチを拵えてくれた＜イギリス人＞バーテンから受けた忘れえぬ親切・恩義を、たとえばこの＜ドイツ人＞たちに向かって恩返しするという発想は、ジャックには毛頭浮かばない。最後のジャックの台詞の「ドイツ人はどこから来るのか？」は、上演では一種のとぼけた不条理なジョークのごとく強調されて扱われ、首都ダブリンを地球の裏側のように感じ、生涯の大半をこの村で過ごしてきただろうジャックの地理的無教養も感じさせていた。しかし、ジャックの直前の台詞に「彼らはドイツからくるのか？」があり、国と人種が必ずしも一致しない現実認識を踏まえての台詞であることを考えれば、わざわざドイツからきたのか、それとも距離的に近く、船や飛行機の便もいい北欧（ノルウェー、デンマーク）在住のドイツ系の間人かもしれない、と想像しても、それほど荒唐無稽ではない。もちろん、ドイツ人たちの出身地がどこであろうと、それは取るに足りない事柄である。想像したところで何の役にも立たない、取るに足りない瑣末な事柄への詮索こそは、パブでの雑談の

本質を浮き彫りにするものであり、ここは酔払いの不条理ジョークではなく、しみじみとペイソスで結ばせるべきではなかったか、と筆者には思われる。

(d) 作品の特色と主題

『堰^{ウイア}』が英米でヒットした理由には、これがアイルランド演劇の特質を体現しているからだという指摘がある。〈田舎の小さなパブ〉が舞台となるのは、ほぼ1世紀前のシング (John Millington Synge, 1871-1909) の『西国の伊達男』(*The Playboy of the Western World*, 1907) と同じである。標準的・本格的な上演時間の分量 (文学座公演のときは1時間50分) がありながら、休憩の幕間を設けずに一気に演じ切り、しかも具体的な中身は、パブでの酒を飲みながらの話だけ、というのも、実は先輩劇作家トマス・マーフィー (Thomas Murphy, 1935-) の『帰郷の会話』(*Conversations on a Homecoming*, 1985) に先例がある。都会と田舎、町と村の対比、生涯独身や晩婚の男たち、抑圧社会で性の対象となる女たち——これらはアイルランド演劇の、ある意味で常套的伝統的な主題であることは言うまでもない。だからこそ、英米の観客に安心して「アイルランド産」の折紙つきと見なされたというのである。アイルランド農村での男たちの結婚難の状況、とくに深刻な花嫁不足の問題は、映画『恋はワンダフル!?!』(*The Matchmaker*, 1997) や、最近では『クローサー・ユー・ゲット』(*The Closer You Get*, 2000) で、わざわざ新聞広告まで出して適齢期のアメリカ女性を花嫁募集する男たちの哀れな姿にコミカルに描かれている。

最後に一つだけ、アイルランド伝説・民話との関わりについて指摘しておきたい。ヴァレリの娘、そしてウォルシュ家の三女はどちらも「ニーヴ」(発音記号では [niəv], つまり「ニアヴ」に近い) という名前であった。これはマクファーソンがよく登場人物に愛用する名前でもあるが、アイルランド伝説で、「海の息子」を意味する海神マクリル (Mac Ler) ——マン島の由来でもあるマナナン (Manannan) の異名も合わせ持つ——の、金髪の娘の名前でもある。すなわち「ニーヴ」とは、わが国の浦島伝説に酷似する「常若の国」(Tir na n'Og) の王女 (つまりは「乙姫さま」) の名前であり、オシアン (Ossian) を誘惑して結婚し、わずか3週間の生活と思えた夢のような暮らしが実際には300年の年月が過ぎていたという。ヴァレリの娘ニーヴの死がプールでの水難事故死だったのも、この大海原を司る王女に召された連想を呼ぶであろう。しかもそのプールが、保健センターという医療施設の付属プールでありながら、現場では治療に対応できず、別の医療施設に搬送される途中で亡くなったというのは、皮肉な巡り合わせである。

⑥ 『ダブリン祝歌』(*Dublin Carol*) 1幕3部構成。

鵜澤麻由子さんが『ザ・ウィアー』のプログラム・パンフレットのエッセイ「Riding The

Wave」で触れているような、「この作品の評判はあまりよろしくない」というのが俄かには信じられないほど、構成のまとまりや全体の情感は豊かである。登場人物ジョン、マーク、メアリー、言及される息子ポールの名前は聖書にゆかりの深い名前だし、クリスマス物にふさわしくノエル、キャロルという名前も言及される。ストーリーは簡単にまとめれば、酒に溺れ妻子を捨てて蒸発した人格破産者が、娘の説得を受け入れて、自己逃避の弱さと決別し、病重篤な妻に会いに行く決心をする物語である。狭い街ダブリンで久しく離れ離れになるとは想像しにくいし、ジョンのように親権を実質上放棄した状態で20年近くも失踪・別居することが法律上許容されているとは思えないのだが、まもなく迎えにくる娘のためにクリスマスの飾りつけを行なう最後の場面は、新しい人生の誕生を予感させて、クリスマスにふさわしい結びである。この時期定番のディケンズの『クリスマス・キャロル』と並んで、マクファーソンのこの『ダブリン^{キャロル}祝歌』公演が21世紀の年の瀬には定着してほしいものである。ディケンズと言えば、『デイヴィッド・コパフィールド』にも葬儀屋の男が登場し、親友が病気でも見舞いにいけやしない、と嘆く場面がある。舞台には登場しないものの、人間の死を^{なりわい}生業とし、いま病の床にある葬儀屋ノエルの運命や人柄には、同じような哀しみが漂っている。

ダブリン市内北部のフェアビューあるいはノース・ストランド・ロード辺りの事務所を舞台に、クリスマス・イブ(12月24日)の一日——午前の遅い時刻(1部)、午後早い時刻(2部)、午後4時から5時(3部)——を描く作品。登場人物は50代後半の葬儀屋ジョン(John Plunkett)、葬儀店主ノエル(Noel)の甥で助手役を務める20歳のマーク(Mark)、ジョンの娘で30代のメアリー(Mary)の3人。

第1部。イブ当日で、12月だけの待降節カレンダー(Advent Calendar)の小窓もあと僅か。すこし雨に濡れたマーク、続いてジョンが事務所に登場。この日も朝から葬儀が営まれたらしく、ジョンはマークの仕事ぶりを褒める。近くのパブの話題が出て、司祭の多い店は食事が美味い証拠だ、と教え、マークは、スチュワードスの恋人と^{ゆうべ}昨夜その店で飲んだこと、脚が太く見える制服姿はいやなこと、キムという名前のその娘は浅黒い肌であることなどを語る。マークがミサに行っていないことを聞くと、自分も長年ご無沙汰だが、職業柄ミサの教会の近くにいることが多いので覗いてみたくなる、とジョン。クリスマスになると、やれナイフ類やトースター、ヘア・ドライヤーなどと、下らない贈物が世間に出回るのは嘆かわしいことだ、映画で禿頭のインディアンを見かけないのは、自然の汗油の効能であり、むしろ洗髪をしないのがよいのだ、などと冗談の後、マークに入院中の叔父ノエルのお見舞いに行くことを勧める。昨夜、面会時刻も過ぎた深夜にジョンはこっそり病棟に足を運んだが、一時帰宅の許されるクリスマス時期とあって、入院患者はノエルを含めて2人だけ。検査漬けの毎日でぐったりと疲れ、青白いテレビ画面を寂しく見ているノエルの姿に、思わず病院を脱走させてやりたくなった、とジョン。薬のせいか腹具合が悪くても看護婦に^{しも}下の依頼をするのが恥ずかしくて我慢し、気分が悪い(yucky)ことをジョンが代わって看護婦に連絡すると、やはりなにか別のお薬を渡されただけ…。ジョンにとってこのノエルは、いわば命の恩人だった。自堕落な生活をしてきた彼にいまの仕事を斡旋してくれたからだ。(マークも高卒後3年ほどぶらぶらしてきたが、来秋の大

学進学を目指している。)葬式は後に残された人々のためのものであり、自分の葬式はひっそりと地味にやりたい、死んでから哀悼の意を表されてもはじまらない、生前に尊敬を得ないのなら、たまたま死んだからといって死後に敬意を払って貰いたくない、自分の人生を振り返ってみると恥ずかしいことばかり。そんな自分の葬式に大勢の人が来て、惜しい人をなくしましたなあ、などと噂されるのは筋違いというもの。ツリーを見て、子どものころはクリスマスが大好きで、贈物を家中に隠したり、サンタさんにケーキと飲み物を「差し入れ」で置いたりしたこともあった。そろそろ立ち去ろうとするマークの気配に、ジョンは朝食代わりにと、ビスケットをしきりに勧め、恩人ノエルとの出会いの昔話を披露する。——ノエルはいつも一人きりで座って新聞を読み、多くの知人が声をかけ、ひとしきり冗談を交わすが、じきにまた殻に籠るといった、いかにも「葬儀屋」タイプの人間だった。当時「ハニガンズ」という名の近くのパブで、ノエルは真面目な顔をして辛辣な冗談を飛ばしてはみんなを笑わせていた (in stitches)。ジョンは身の上話を切りだし、大酒のみ (hit the bottle goodo) が災いして失業、貯えも底を尽き、いまや奈落の底へ転落して (on the fucking skids) 浮浪者になりかねない窮状にあることを率直に打ち明けて、胸のつかえを下ろした。聞き役に静かに徹していたノエルは、事務所を訪ねてくるように言い、ジョンに仕事と空き部屋を与えたのだった。しかもジョンの自尊心を傷つけないよう、彼の方でも人材を必要としており出会えて幸運だった、という言い回しで。その夜『ピーター・パン』の登場人物みたいなパジャマをあてがわれ、朝起こされると、揚げ物にハム、卵、トーストの充実した朝食。それ以来、朝食をしつかりと摂る習慣がついたという。ジョンの仕事内容は、花輪手配、お棺運び、そして陰鬱そうな態度。かつてこの葬儀屋には、ほかに2人の従業員がいて、務所帰りのような打ちひしがれた男たちだったが、いまではもう退職している。週に何度かノエルはその2人とジョンを飲み連れていってくれた。しかし、職業柄、悲惨な遺体——自殺者や女性の他殺体、ひどいときには14歳の少女がトイレに生み落とした嬰兒の遺体——にも遭遇したが、睡眠薬自殺を図ったある癌患者の老人の死顔は安らかで、中庭には植木や仏像があり、オープン・プラン建築の屋敷を流れる風が安らぎを感じさせてくれたこともあった。話が一段落し、立ち去るマークに、週給は午後払うから出直してくれ、と伝え、後片付けしてジョンも事務所を出ていく。去り際に、「仏陀か」とつぶやいて。溶暗。

第2部。ジョンの娘メアリー、遅れてジョンが酒屋で買ったウィスキーを抱えて登場。「びっくりした」を繰り返し、一気に2杯飲み干すジョン。やがて事情は次第に明瞭になるのだが、メアリーは母親ヘレン (Helen) の入院を告げに訪れ、(スーパーで働いている) 彼女は夕方5時に再度迎えにくる、と言う。イギリスでオートバイ修理工として働いている弟ポール (Paul) も月曜 (27日) には帰省する予定。息子ポールのことを心配するジョンに、喋り方、頷き方、パブでのたたずまいが父さんに似てきた、とメアリー。ポールにはストーカー紛いに付きまとう女友達がいて、がりがり蓬髪、外食とチョコのせいで痤疮 (acne) 病みの猿みたいな女で、居留守を使って騙していたが、あるとき家に上がり込んで朝まで居座ったこともある奇行の女である。メアリーは父親と過ごした幼い頃の思い出を語る。25年前、旅先のリムリックで、袖無し服でイラクサの茂みに入って身動きがとれなくなった自分を、父さんが茂みを掻き分け、抱きあげて助け出してくれたこと、弟ポールがこのとき靴をなくしたこと、ある晩、父さんが深夜になっても戻らず、みんなが心配したこと (このときジョンは映画を見たあと、深夜営業が多い田舎のパブに寄っていた)。実は、この父と娘は10年ぶりの再会で、10年前も市内で出くわして喫茶店に寄っただけのことだった。弟出産で母親が入院中のときも父さんは飲んだくれていたし、いつも言い訳ばかりの父さんを、愛してもいるし憎んでもいる、とメアリーは喉をつまらせて訴え、昔の恋人の話始める。職場の女友達の兄で小学校教師、大きな赤ら顔のその男とは何度かカクテルを飲む程度の付き合いだったが、彼の家に誘われたときも、プレイボー

イとしては父さんほどでもない素人で、朝になっても二日酔いと生徒の宿題添削仕事の泣き言ばかりだったという。続いて、ジョン失踪当日の金曜日の模様をメアリーは語る。メアリーは当時7歳。学校にいつも迎えにくる母親の代わりにジョンが酒の匂いをぶんぶんさせて千鳥足で現れ、バス停を間違えて逆の市内方向のバスに乗車、あろうことか子ども連れでパブに入り、カウンターで飲む父親の足元の床で、メアリーは宗教の教科書を広げて、神様助けて、と祈っていたら、喧嘩か何か起きて、父親が椅子から転がり落ちてきて、結局は警察に送り届けた貰ったという。娘の語るその惨めな話を聞かされて、地獄の苦痛を味わい、俺は生まれてこなければよかった、(駆落ちには至らなかったが) 自分に尽くしてくれるキャロル (Carol) という未亡人の家で一夜を過ごした朝、妻なら買わないだろう、安っぽく、けばけばしいブラインドの調節紐 (tassels) を見ているうちに、己が薄汚さや妻子との心の隔たりを痛感した、と懺悔するジョン。キャロルは随分前に死別した亭主の衣服を捨てずに取ってあり、嘔吐で汚れた服の代わりにその故人の服を借りて、我が家へ歩いて帰る道すがら、妻になにかもか謝って今度こそ生まれ変わろう、と決意を固め、妻の姿が窓に映る二階へ神妙に上がって行ったこともあるという。ところが妻と見間違えたのはパンこね台 (breadboard) かなにかで、やにわに決意は萎み、またぞろ飲みに出てしまった。他人の家ではみんな楽しくクリスマスを過ごしている。しかし自分はその雰囲気をおち壊し、ひとり寂しく立ち去るばかり。過去に戻っていまさらやり直したいとは思わない、ただ過去などなかったことにして消し去りたい、と願うジョン。わざと無茶な真似をする変わり者父さんだけの責任でなく、私にもちょっと馬鹿なところがある、と助け船を出すメアリーに、それは母さん譲りだ、とジョー。「二人とも仲良くしてるか」の台詞に思わず涙ぐみ、逆境のせいで逞しさを身につけ、ユーモアも忘れない、優しい母さんが好きだ、いっそ両親が男と女でなく、男同士か女同士だったら仲良くやっていけるのに、と思ったこともある、と答える。ジョーは恩人ノエルのお話を持ち出し、彼を見舞いに行ったときに、この善人に対してすら心の片隅で、同情のかけらもない、薄情な本音が蠢いたことがある、自分はそれほど卑劣な性根の人間だと言って、自己譴責する。煙草片手に犬をずっと散歩させ、近所の人々からは変わり者と思われたとき、父さんに近づけたみたいで嬉しかった、ととりなすメアリーに、ジョンは自分の心の闇の正体を打ち明ける。倦怠、孤独、疎外、恐怖、不安、緊張——その源は彼の幼児体験に遡る。ジョンの父親は妻に暴力をふるう男で、子どもの頃は怖くてベッドの下に隠れ、かわいそうな母親を助けようともしない意気地なしだった。久しく忘れていたその臆病さは、メアリー誕生後にもたげてきて、<いざというときに自分は、卑劣にも妻子を捨て、自分だけ逃げてしまうに違いない>という恐ろしい確信を抱いたのだという。もしものときは母親の葬儀を行なってほしい、と頼むメアリーに、顔を合わすだけでも辛いのに、土中に埋めるなど耐えられない、とジョン。お見舞いにはぜひ素面で来てほしい、5時に迎えに来るから、と言い残し(このとき一度だけ'Da'と呼びかける)、メアリーは去る。立ち尽くすジョン。溶暗。

第3部。ウィスキー瓶の4分の3は空になり、ジョーは酔って椅子で寝ている。普段着に着替えたマークが登場。目覚めたジョンは、寝過ごして銀行預金を引き出すのを忘れ、持ち合わせの金では足りず、彼に給料の支払いが出来ないのを何度も詫げる。トイレから戻ると、マークが塞いでいる様子に気づく。勧めた酒を手酌で2杯ぐいと飲むマークに、事情を訊くと、恋人キムへの自分の思いが冷めているのを悟って、別れを告げに彼女の自宅まで訪ねていったのだという。ところがキムは早朝勤務で疲れていて、家で仮眠をとっており、かすかな高音の鼾をかきはじめた。こうして、結局別れ話は切り出せずに、一人で2時間パブで飲んできたという。ジョンは、そいつは狸寝入りだったかもしらんぞ、女の愛情は男と違い、長年に渡って変わらずに続くこともある、孤独に耐えられなくて自分を求めた未亡人キャロルは、いつもなけなしの金を工面して酒の勘定を払ってくれ、<酒の天使>を

自認する俺のお守役に神様が遣わしたような重宝な存在に思っていたが、「あなたを守るためならなんでもするわ」式の無条件の愛情は危険なものだ、と一席ぶつ。マークは狸寝入りの件や、ジョンのいかにも人生の師匠然とした横柄な口調に、酔いも手伝って怒り出す。負けじとジョンもやり返し、マークはそのまま喧嘩別れしかかるが、ジョンがあわてて事情を説明——長年会っていない妻が頸部癌で余命いくばくもないこと、その妻の葬儀を任されたこと、もうすぐ迎えにくる娘とともに病院に見舞いに行くことを伝える。息子ポールとも随分会っておらず、数年前に訪ねて来たときには居留守を使って会わなかったが、すぐあとで高校卒業試験合格を知らせる手紙が彼から届いたという。ジョンはマークに待降節カレンダーの最後の窓をめくらせ、ツリーの飾り付けをしまう箱を庭から運ばせる。その間ジョンは、酩酊サイクルの自覚症状を日を追って詳しく講釈し、気分を良くさせようと未亡人が買っていた酒は、こうした惨めな躁鬱症状をまねくだけ、だが、ノエルの倍ほど飲んでも程々の時間に就寝するところは、しこたま飲んだはいいが、ズボンにお漏らしするような、きょうびの若い者とは雲泥の差だ、と意気盛ん。マークは明朝、母親と叔父ノエルの見舞いに行く予定にしたと告げる。12月だけの待降節カレンダーでなく、ジョークや格言を記載した同形式の年間カレンダーがあればいいのにと、サンタが恋人キムを靴下に滑り込ませるかもな、ときつい軽口をたたく。ジョンがウォークマンをして立ち去ると、ジョンはラジオをつけて音楽を流しながら、石鹸で洗顔、身支度を整え、髪を梳かす。はずした待降節カレンダーを元のように壁にかけ、しまった飾り付けを箱から取り出して、椅子に上ってまた飾り付けを始めるうちに、5時を告げる教会の鐘。溶暗し、音楽と鐘の音も止む。

II マクファーソン演劇の特色

まだまだこれから大いなる活躍が期待される若手作家であるが、これまでの6作品の概観から言える特色を4点、以下に簡単にまとめてみたい。

① 飲酒への惑溺

アイルランド人全般が酒と切っても切れない関係にあることは周知の事実だが、それにしてもマクファーソン劇の登場人物の飲みっぷりは度を越えている。『ラム酒にウオッカ』の主人公などはいったい一日に何杯飲んでいるのかわからないほどの蟒蛇^{うわばみ}である。ダブリンの伝説的酔いどれ劇作家ブレンダン・ビーアン (Brendan Behan, 1923-64) の衣鉢を継ぐ作風をはやくも感じさせる。飲んで吐き、吐いては飲むすさまじさ、たえずアルコールの匂いがぶんぶんと漂うような彼の演劇世界は、まるで英作家マルコム・ラウリー (Clarence Malcolm Lowry, 1909-57) の『活火山の下で』(Under the Volcano, 1947) を、さらにまた、『この菩提樹の四阿』第2部の幻想的酩酊の世界は、『聖なる酔払い伝説』も彷彿とさせる。

② 初期作品の性的放蕩

飲酒と並行して特筆すべきは、性的放蕩である。1990年代を生きた20代男性作家という時代的ジェンダー的影響もあるだろうけれど、大胆露骨な性描写には驚かされることも少なくない。『ラム酒にウオッカ』では、行きずりの男と一夜を共にしたあとも変態恋人のお相手を

する知的ブルジョアのウェールズ人娘の奔放さや、彼女の友人仲間の富裕階級の若者たちの道徳的退廃ぶりが描かれ、『この菩提樹の四阿』ではディスコ帰りの深夜の墓場での強姦シーン(いわゆる準強制婦女暴行)を典型に、無軌道な都会の不良少年たちの荒廃した現実の一面が描かれている。そこには、マクファーソン自身や同世代のマーティン・マクドナが影響を受けたとされる米劇作家マメット(David Mamet, 1947-)の描く、墮落した男たちのマッチョでハード・ボイルドな世界が感じられ、たとえば個人的にはマメットの『エドモンド』(Edmond, 1983)の惨めな一夜が浮かんだりした。男の性的欲望がストレイトに描写されている身勝手な台詞の多くは、今後フェミニストからは批判を招くかもしれない。『堰』がヒットした理由を<アイルランド演劇らしさ>に求める説を紹介したが、この作品に限っては、女性を喰いものにする獰猛な性欲描写が自重気味に抑圧され、下心の有無は別として、ヴァレリを取り巻く4人の田舎者の男たちが無骨なまでに誠実で暖かな人間として造型されていることが、欲望や暴力シーンに慣れた英米の観客に新鮮に映ったということもあるかも知れない。『欲望という名の電車』のランチのように、間違ってもヴァレリが男に乱暴されたりしないことが観客に安心感を与えるのであり、『堰』以前のマクファーソンであれば、ヴァレリもまた男たちの性的放恣の犠牲者ないし具現者と描かれていたはずであろうし、最新作の『ダブリン祝歌』でもこうした脱・猥褻路線が踏襲されており、おそらく今後のマクファーソン劇の方向を示唆するものだろう。

③ モノログ形式へのこだわり

繰り返しになるが、マクファーソン劇の真骨頂はそのモノログ文体にある。初期4作品はすべてこの形式で貫かれ、『堰』や『ダブリン祝歌』の第2部や第3部でも、特定の登場人物の台詞が突出して長大であり、基本的にはモノログに重点をおいて、じっくりと話を聞かせようという形式になっている。テキストでは、ほぼ1センテンスごとに空白行が1行設けられ(いわゆるダブル・スペース印刷)、語りをセンテンス単位に分節化している。この表記は、役者が台本を暗記するのに便利なように考案されたのか、散文詩のような余情を醸成しようとしたのか、筆者は推測の域を出ないのだが、論理的に意味のある文章の固まりをパラグラフ(段落)で表現するという、伝統的な文章スタイルを打破していることは特記したい。この分かち書き手法は、決して脈略不明な語群の羅列ではなく、梗概で示したように、きわめて巧妙な話術・話法の才で進められており、落語や漫談、講談といった一人語りの伝統芸を持つ日本ではきっと受け入れられることだろう。

④ 娘との絆

父親の視点からの幼い娘への思い入れが顕著である。『ラム酒とウォッカ』の主人公には2人の小さな娘ニアヴとキャロルがいて、彼女たちのあどけない寝顔に主人公が改心する結末は印象的である。『善良な泥棒』の主人公は旧友の妻の赤ん坊を抱っこして腕のなかで眠ら

せ、人質の少女ニアヴに両手で顔を撫でられて目覚めたときの感触を彼は懐かしく思い起こしている。『聖ニコラス』では主人公の劇作家には大学生の娘がいて、彼女とおそらく同じ世代の若い女優に心を奪われるものの、彼女に娘の姿を重ね合わせた彼は一線を踏み越えられず、逆に吸血鬼の魔の手から彼女を守ろうとする。吸血鬼が語る不思議な挿話でも、幼い頃の妻を愛でる樵が登場する。『堰』では5歳の娘ニアヴが事故死し、同名の少女も不思議な体験をしているが、男たちが静かにその話に耳を傾け、同情する。『ダブリン祝歌』では、メアリーが子ども時代を回想して、父親に抱き上げられたときの嬉しさを語っている。この父親は息子ポールの来訪を避けるなど、むしろ息子との付き合い方に戸惑っている感がある。マクファーソン自身はまだ私生活では未婚のようであるが、『堰』の献辞にも登場する恋人リオナ(Rionach)が、知人の生後一か月の赤ちゃんをあやしている姿に見とれるエッセイもあることから、子ども好きな人柄が想像される。

III マクファーソン談話 (資料)

最後に、『ニュー・ステイツマン』(New Statesman) 誌(1998年2月20日)掲載のマクファーソンのエッセイ⁹⁾の前半部分を拙訳引用して彼の演劇観や政治観を見てみよう。

僕がダブリン出身の20代の劇作家だというので、きっとロンドンで仕事をしているに違いないと、どこに行っても人からは思われている。この推測は当たっている。その主たる理由は、ダブリンの人口がざっと100万人で、グレイター・ロンドンの10分の1の規模であることだ。アイルランド人作家たちは、ダブリンの劇場が自分たちの作品に対して示している、熱狂の欠如を嘆くかもしれない。僕はパブに陣取るや、この問題に関してのべつ喋ってきたものだ。しかし、実際には、無名劇作家の安定した流れを支援するほどの市場はまったく存在しないのだ。

芝居は映画入場券の4倍の価値があると少数の観客に納得させるのに必死になって、さらには映画よりはるかに危険な収益のせいで、ダブリンの劇場は次の2つのうちどちらかの方法で対応している。一つは、主要人気作品を繰り返し焼き直すことである。ショーン・オケイシーの初期3部作の一つはけっこう安全牌だ。得られる中身を観客が知っているし、2、3人テレビ俳優を起用すれば、バス満載の観客がやってくるだろう。

二つ目は、事実上の有利な立場を採用して、芝居の観客は、映画観客の主流とは異なるものと認識することだ。演劇は知的な援助、自分にとって有益であると思われるものになる。無名劇作家がダブリンでヒットをあげる可能性がどのくらいかは分からないが、開拓的で知的な〈劇のヒット〉をあげる可能性は、いっそう少ないにちがいない。だから、賃金を支払う職員を大勢抱えたプロ劇場は、若手の無名作家には注意を払わないのだ。

芝居を見にくる沢山の観客を惹き寄せられる、と確信をもって分かっているのでなければ、アビー劇場なりゲイト劇場なりの机の上に届いたばかりの、誰も頼みもしない作品なんかは、買おうという気にはならないものだ。観客を惹き寄せる可能性ならば、もちろん、ロンドンの方が10倍大きい。ロンドンには新作を見たがる観客がいる。新聞やテレビ番組は情熱的に新作を論評する。新作には多く

の賞もある。作家紹介があり、劇場を支えている。

長年にわたって僕は、自分の作品をダブリンの小さなフリンジ会場で上演した。するとロンドンから来た、あるエイジェントが僕の芝居の1つを見て、僕を雇ってくれた。1か月もしないうちにロイヤル・コート劇場とブッシュ劇場が関心を示した。

新作委嘱の標準額は約1,000ポンド [およそ16万円] だ。これと引き換えに作家は芝居を書くのに同意し、作品を提供すればさらに1,000ポンドが支払われる。もし劇場側が気に入って、公演予定に組み込めば、初演のときに多少の金額と、切符売上収入の10%を作家は受け取る。座席数100の劇場で5週間公演されれば、作家は1500から2000ポンドを期待できる。しかし切符が完売にならないことはままあることだし、ロイヤル・コート劇場二階席でかかった僕の芝居『ウィア』のように、わずかに60席の場合もある。

つまり、概して、ロンドンの新人劇作家は1つの芝居で4,000ポンド [64万円] あたりを稼ぐだろう。この額で1年とか2年やっていかねばならないから、作家は収入不足を他で補わなければならない。新作への賞である、ジョージ・ディヴァイン賞、ジョン・ホワイティング賞、マイヤー・ホウイトワース賞などはすべて現金の賞である。あるいは、エイジェントがテレビや映画の脚本といった、実入りのいい仕事の委嘱をうまく手に入れてくれるかもしれない。

しかし、ロンドンで本当に手に入るもの、しかも即座に手に入るものは、メディアの注目である。20種類の出版物で自分の芝居が厳しく吟味される。そして劇評や劇評家を本人がどう思おうとも、とにかく、いい劇評を得ないなら、観客は来ない。

ロンドンでは僕はいつのまにか、まったく違う2つの派に属していると見なされた。1つは、最近とみにメディアの注目を集めた20歳ちょっとの劇作家たち——ジェズ・バターワース、ジョー・ペンホール、ニック・グロッツ、サミュエル・アダムソン、マーティン・マクドナである。しかし同時に僕は、ロンドンの劇場に「溢れかえっている」ように思える、いわゆるアイルランド作家一派——セバスティアン・バリー、マリナ・カー、ジーナ・モクスリー、ダラ・カーヴィル、ビリー・ロウチなど——にも押し込まれた。

自分では自国について意識的に書こうとしたつもりはまったくないのだが、一部の批評家には僕の作品はアイルランド問題を示唆しているように思われたようだ。英愛二国間関係を考えれば、それもむべなることかもしれない。ある劇評家は、幻滅した哲学教授とダブリンの2兄弟を主人公とするモノローグ集『この菩提樹の四阿』を評して、北アイルランド紛争が背景設定にあるのが避けられない、と見なした。別の劇評家は、田舎パブで4人の男が怪談話をする『堰』を評して「アイルランドへの鎮魂歌^{レクイエム}」とさえ形容した。

一部の人々にとっては当てはまるかもしれないが、僕がやろうとしたことはただ、観客の注意を惹きつけ、大笑いをさせ、願わくば作品と観客との間に連帯感を生み出すことだった。地理や政治に関心はなかった。僕はアイルランド共和国出身で、僕の芝居はこの国に起源をもつけけれども、自国について語る必要から生じたものではない。とはいえ、僕の国籍は、僕が論評を受ける文脈を形成している。そして、ロンドンでは、アイルランド人であることは、たとえばデンマーク人にはない響きがあるのだ。

僕の年代の人間は、アイルランドの暴力に対しては当惑した無関心を抱いて成長した。紛争で覚えている最初の記憶は、爆弾事件による殺人についてのあるニュースを母親が説明している姿だった。母親は、軍隊、つまりIRAについてなにか言い、それが正規軍だった時代に僕の祖父がその軍隊で戦った、と言った。でも、いまではその軍隊は正規軍ではないのだと。子どものころの状況認識は、いまでも多くの人々が抱いている当惑の感情を形作ったのだろう。北アイルランドの領有権主張から

歴代の政府が次第に手を引くようになっていた民主的共和国で僕らは育ったのだ…。

注

- 1) 信頼度の高いネット上のサイトで、マクドナの生年は1970年と明記されている。http://www.bedfordstmartins.com/litlinks/drama/mcdonagh.htm
- 2) James Christopher, "The problem with Irish road movies is that you arrive too soon", in *The Observer*, 25 January 1998, p.8. [Interview with Conor McPherson].
- 3) この標題は翻訳不能である。著者は脚本の冒頭に「きのうぼくは、アリストンの息子グラウコンといっしょに、ペイライエウスまで出かけて行った。」[プラトン(藤沢令夫訳)『国家(上)』(岩波文庫, 1979/96年), p.16.]という『国家』のまさに書き出し部分のソクラテスの台詞引用を掲げ、「僕は出かけた」という意味だと糊塗しているようだ。しかしながら、リチャード・A・スピーアーズ編, 山田政美訳編『英語スラング辞典』(研究社, 1989年), p.214.には, 見出し語'go down'に「1. (女が) 性交に応じる 2. (女, または男が) 性交する (両義共英米俗. 1900年代半ばから現在)」, さらに前置詞のついた'go down on'にオーラル・セックスの意味の説明をあてている。このことは, Harold Wentworth & Stuart Berg Flexner (eds.), *Dictionary of American Slang* 2nd ed. (New York: Thomas Y. Crowell, 1975), p.219. の'go down on [someone]'の語釈——'To commit cunnilingus or fellation with someone'とも一致する。その一方で, 'go down'自体がもともと「下(半身) へ下がる」訳だからオーラル・セックスを含意し, 普通の性行為を意味する婉曲的用例の方がかえって「紛らわしい」使い方だと指摘する以下のような辞書の記述もある。——*go down*, usually for oral-genital sex (CUNNILINGUIS or FELLATIO) but also, confusingly, a (sic) euphemism in some parts of the country for conventional COPULATION. [Hugh Rawson, *A Dictionary of Euphemisms & Other Doubletalk* (New York: Crown Publishers, 1981), p.123.]——つまり, これらからすると標題には「俺ヤっちゃった」という性的なニュアンスが同時に込められていることは明らかである。
- 4) 1993年1月, 61年ぶりにフィアナ・フォイル (Fianna Fail) 党と労働党が連携したことを指す。92年総選挙で躍進した労働党は, 野党第一党のフィネ・ゲイル (Fine Gael) 党や進歩民主党 (Progressive Democrats) と弱者連合 (rainbow coalition) を組めば, レイノルド (Albert Reynolds) 首相率いる暫定政権を打倒できる見込みがあった。しかし, 党首間の意見調整がつかず, 結局労働党党首スプリングは逆にレイノルド首相との連携に乗り出し, 副首相兼外相(1993-7) に就任した。Sydney Elliot & W.D.Flackes (eds.), *Conflict in Northern Ireland: An Encyclopedia* (Santa Barbara, CA: ABC-CLIO, 1999). p.453.
- 5) W.G.T.Shedd (ed.), *The Complete Works of Samuel Taylor Coleridge* vol.VII (New York: Harper & Brothers, 1868); reprinted by Rinsen Book Co., Kyoto, 1989; pp.166-8.
- 6) Nicholas Grene, *The Politics of Irish Drama: Plays in Context from Boucicault to Friel* (Cambridge: Cambridge University Press, 1999), p.261.
- 7) 2000年4月現在のアイルランド人口は378万7千人(前年比1.1%増)で, ほぼ120年前の1881年の水準に達したという。1996年以降は, 流入のほうが流出を上回っている。『朝日新聞』2000年9月19日, p.8.
- 8) Conor McPherson, "If you're young Irish playwright, come to London" in *New Statesman*, 127, (4373), 20 Feb 1998, pp.40-1.

参考文献

- 鶴澤麻由子 訳『ザ・ウィアー(堰)』(文学座アトリエ上演台本, 2000年11月15日～12月20日), 132 pp.
F. Gibbons, "I don't want to sound like a bollix, but...", *Guardian*, 19 Feb. 1998, suppt., pp.8-9.
[Interview with Conor McPherson]
Pamela Renner, "Haunts of the Very Irish" in *American Theatre*, 15: 6, pp.20-1.
Programme of the Irish Premiere of *The Weir* at the Gate Theatre, Dublin (7th July, 1998)
(愛知淑徳大学の山田久美子さんから資料提供いただきました)

使用テキスト

- Conor McPherson, *The Weir and Other Plays* (New York: Theater Communications Group, 1999)
Conor McPherson, *I Went Down: The Shooting Script* (London: Nick Hern Books, 1997)
Conor McPherson, *Dublin Carol* (London: Nick Hern Books/New York: Theater Communications Group, 2000)

Filmography

I Went Down (1997/Color/111 Min.)

謝 辞

『ザ・ウィアー』公演に関して、台本や舞台写真のご提供を賜りました文学座の伊藤正道さんに厚くお礼申し上げます。